

錢畠遺跡・梯遺跡

県営ほ場整備事業（経営体育成型）犬丸梯地区に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012.3

石川県小松市教育委員会

例　言

1. 本書は、県営ほ場整備事業（経営体育成型）犬丸梯地区に係る銭畠遺跡・梯遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。
[調査地] 石川県小松市梯町地内
[調査原因] 県営ほ場整備事業（経営体育成型）
　　犬丸梯地区
[調査面積] 842m²
[発掘調査] 2011. 6. 6 ~ 2011. 8.12
　　2011.11. 7 ~ 2011.11.28
[調査担当] 宮田 明
3. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施し、嘱託職員として北村史織の補助を受けた。
4. 出土品整理並びに実測・製図は臨時作業員を雇用して実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影、並びに遺物の写真撮影は宮田が行った。
6. 本書の執筆・編集は宮田が担当した。
7. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市教育委員会で一括保管している。
8. 梯町生産組合および梯町町内会の皆様には、発掘調査への協力ならびに発掘調査成果を紹介する機会を設けていただき、地元の方々から有益なご教示をいただくことができました。記して感謝の意を表します。

凡　例

1. 本書に示す座標（VII系）は世界測地系に準拠した。
2. 本書に示す方位は座標北である。
3. 本書に示す高度は標高（T.P.に準拠）である。
4. 本書に示す土色はマンセル表色系に準拠している。
5. 本書に示す土性、コンシスティンス及びその他の属性は、日本ペドロジー学会の示す判定法を参考として表記した。ただし、厳密なものではない。
6. その他の凡例は、本文中に適宜示す。

目　次

本　文

I	位置と環境	1
II	調査の概要	13
III	銭畠遺跡の調査	14
IV	梯遺跡の調査	16
V	結語	20

図　版

銭畠遺跡 平面図	図版 1
銭畠遺跡 遺構実測図 1～4	図版 2
銭畠遺跡 出土遺物実測図 1～2	図版 6
梯遺跡 平面図	図版 8
梯遺跡 遺構実測図 1～2	図版 9
梯遺跡 出土遺物実測図 1～2	図版 11

写真図版

銭畠遺跡 発掘調査 1～3	写真図版 1
銭畠遺跡 出土遺物	写真図版 4
梯遺跡 発掘調査 1～3	写真図版 5
梯遺跡 出土遺物	写真図版 8

卷　末

報告書抄録

I 位置と環境

1 地理的環境

1) 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km² を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣 7 町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後 2 次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2) 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火碎流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5～10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・津上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3) 梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ

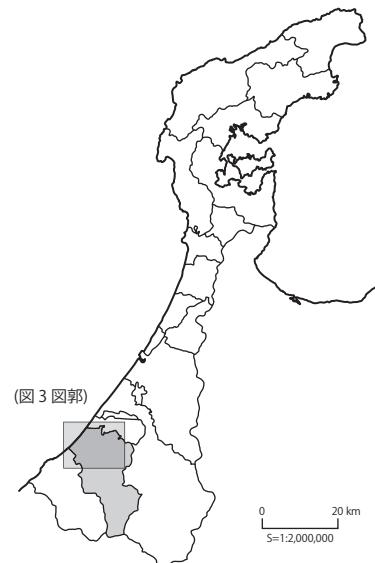


図 1 小松市の位置

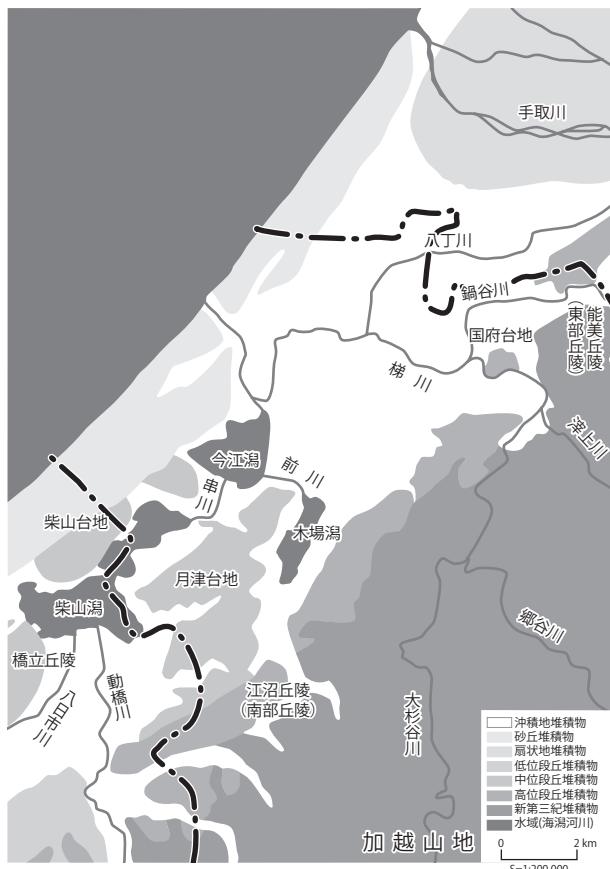
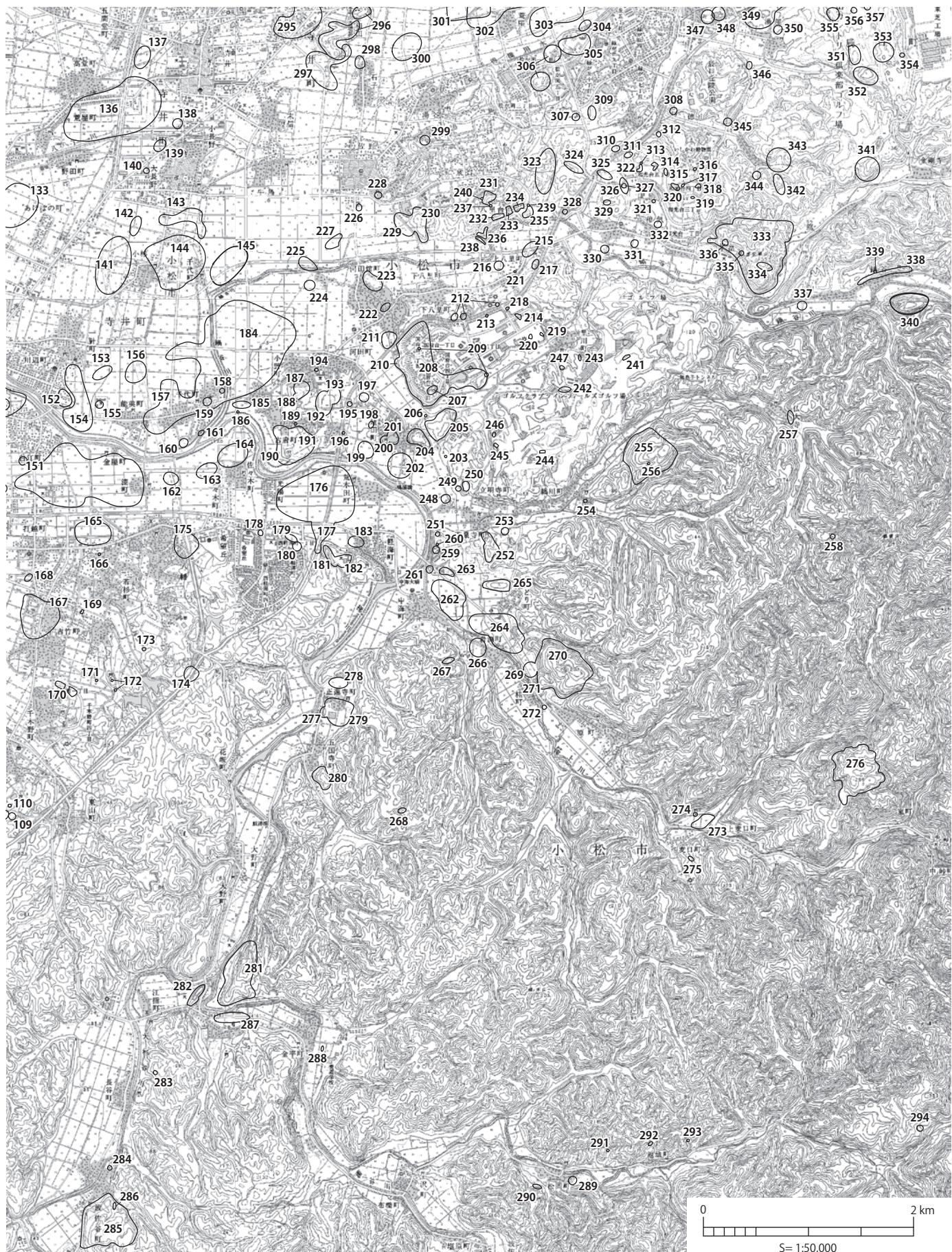


図2 小松市の地形



図3 遺跡分布図



れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

2 歴史的環境

1) 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（207）や八里向山 A～F 遺跡（231～236）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A～D 遺跡や宮竹うっしょやま A・B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念佛林遺跡（22）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2) 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（123）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡（136）、大長野 A 遺跡（141）、漆町遺跡（151）、荒木田遺跡（176）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（207）や八里向山 A 遺跡（231）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3) 古 墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳（いずれも図郭外）、和田山 5 号墳（296）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（208）や下開発茶臼山古墳群（305）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代才オキダ遺跡（157）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では臼のほぞ古墳（29）や御幸塚古墳（67）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（37）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4) 古墳時代～古代の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(17)の発掘調査以降、矢田野遺跡(28)、薬師遺跡(55)でL字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群との相關性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(162)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書き土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(250、253、262、269、278、279、280、283)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡(174)、八里向山B遺跡(232)、里川E遺跡(245)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、平成18年度より実施中の松谷寺跡(280)発掘調査において、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(図郭外)で須恵器生産が確認され、以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。紙幅の都合で殆どが図郭から外れているが、辛うじて図郭に収まる林タカヤマ古窯跡(75)は、7世紀前半の須恵器窯3基が調査されている。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:240)で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群(349)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(323)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡(108)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～末ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡(302)、下開発遺跡(303)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(148)、漆町遺跡(151)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(149)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念佛寺塔遺跡(151)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかつた事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りにおいては、ここに比定すべきだろう。

5) 中世の遺跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものであり、本報告に係る錢畠遺跡(130)にも、一向一揆武将蛭川新七郎重親の居館跡とする伝承がある。また、近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は乏しいが、岩渕城跡(270)、岩倉城跡(276)、波佐谷城跡(285)など、縄張図が作成されている事例がある。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にはほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（図郭外）で操業を開始したが、14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6) 近世～現代

近代窯業の関連で、19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（166）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（111）、小野窯（194）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百古墳：66）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：30）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

表1 遺跡地名表

No	名 称	種 別	時 代	備 考
1	柴山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一白 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡 A 地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A 地点）	集落跡	弥生	
	柴山出村遺跡（B 地点）	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日末経塚	経塚	不詳	
12	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
13	茶臼山 A 遺跡	散布地	不詳	
	茶臼山 B 遺跡	散布地	縄文	
14	茶臼山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	
15	月津才方遺跡	散布地	古墳・中世	
16	月津 A 遺跡	散布地	古代（奈良）	
17	額見町遺跡	散布地	縄文	
	集落跡	古墳～中世		
18	額見神社前 A 遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
19	額見神社前 B 遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
20	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
21	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
22	念佛林遺跡	集落跡	縄文	
23	念佛林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
24	矢田新遺跡	集落跡	古代（奈良）	
25	刀何理遺跡	散布地	縄文	
	集落跡	古代～中世		
26	矢田 A 遺跡	散布地	縄文	
27	矢田 B 遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
28	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
29	白のほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
30	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
31	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
32	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
33	念佛塚古墳	古墳	古墳	円墳
34	念佛林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
35	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室、家形石棺

No	名 称	種 别	時 代	備 考
36	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
37	矢田借屋古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
38	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
39	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
40	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
41	蓑輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
42	符津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
43	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
44	矢田野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
45	下粟津 A 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 7 ~ 8
46	島経塚	経塚	不詳	
47	下粟津 B 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2
48	島遺跡	散布地	弥生~古墳・中世	
		集落跡	古墳~古代	
49	島 B 遺跡	散布地	古代	
50	島 C 遺跡	散布地	古墳	方墳?
51	符津 A 遺跡	散布地	縄文	
52	符津 B 遺跡	散布地	縄文	
53	符津 C 遺跡	集落跡	古墳	
54	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文~中世	
55	薬師遺跡	集落跡	古墳~古代	
56	串カソノヤマ A 遺跡	散布地	古代(奈良)	
57	串カソノヤマ B 遺跡	散布地	古墳	
58	串カソノヤマ C 遺跡	散布地	古墳	
59	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
60	孤山遺跡	集落跡	古墳	
61	土百遺跡	散布地	縄文	
62	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
63	五郎座貝塚	貝塚	縄文	
64	矢崎 B 古墳	古墳	古墳	
65	狐山古墳	古墳	古墳	
66	土百古墳	古墳	古墳	
67	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
68	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴 4
69	御幸塚城跡	城館跡	中世	主郭と曲輪の一部
70	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
71	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	煉瓦窯
72	大領遺跡	散布地	古代	
73	浅井畠古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
74	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
75	林遺跡(林タカヤマ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須恵器窯 3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林製鉄跡)	生産遺跡	古代	製鉄炉 2、製炭窯 4、鍛冶炉 2、鋳型坑 2
76	井口遺跡	散布地	不詳	
77	林八幡神社経塚	経塚	中世(鎌倉)	
78	津波倉ホットジ遺跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式坑 6、2 基調査
79	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
80	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
81	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
82	小山田オクサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
83	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	
84	木場古墳群	古墳	古墳	円墳 4
85	木場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
86	池田城跡	城館跡	不詳	
87	木場温泉遺跡	散布地	縄文	
88	木場 A 遺跡(木場遺跡 H 地区)	生産遺跡	古代(奈良)	製鉄炉 1、製炭窯 2
89	木場 B 遺跡	散布地	古代(平安)~中世	
90	木場 C 遺跡	散布地	弥生	
91	木場遺跡 A 地区(1号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯 3、鉱滓散布地
92	木場遺跡 B 地区(2号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉 2、製炭窯 2
93	木場遺跡 C 地区(3号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
94	木場遺跡 D 地区(4号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、製炭窯 1
95	木場遺跡 E 地区(5号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
96	木場遺跡 F 地区(6号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
97	木場遺跡 G 地区(7号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
98	木場遺跡 D 地区(8号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴 1
99	大曲遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
100	長谷醤油屋の山遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
101	三谷遺跡	散布地	縄文	
102	三谷 B 遺跡	散布地	弥生~古墳	
103	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
104	三谷大谷遺跡	集落跡	古代~中世	
105	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、鉱滓散布地
106	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な砦跡か
107	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	製鉄炉 1、製炭窯 1
108	蓮代寺ガシヨウタノ遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯 3、鉱滓散布地
109	蓮代寺 A 遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
110	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶

No	名 称	種 别	時 代	備 考
111	蓮代寺窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
112	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	焼瓦窯
113	蓮台寺跡	社寺跡	中世	渋川氏菩提寺「蓮台寺」比定地
114	安宅閑跡	その他	不詳	県指定史跡
115	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
116	安宅中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
117	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の葺石とも、現存せず
118	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三の丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡
119	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・泥町の町屋跡
120	幸町遺跡	生産遺跡	中世（室町）	鍛冶
121	多太神社境内遺跡	散布地	中世（室町）	埋納錢出土地
122	本折城跡	城館跡	不詳	本折氏居館跡伝承地の一
123	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
124	上小松遺跡	散布地	古代（平安）	
125	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
126	梯川鉄橋 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
127	島田 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
128	島田 B 遺跡	散布地	古墳	
129	御館遺跡	城館跡	中世（室町）	
130	銭畠遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・蛭川新七郎重親居館伝承地
131	梯遺跡	散布地	弥生	
		集落跡	中世	
132	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
133	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
134	長田南遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
		集落跡	中世（室町）	
135	中ノ江遺跡	散布地	古墳～中世	
136	高堂遺跡	集落跡	弥生～中世	
137	高堂四方堂遺跡	散布地	弥生	
138	小長野遺跡	散布地	不詳	
139	小長野 B 遺跡	散布地	古墳	
140	小長野 C 遺跡	集落跡	古代	
141	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
142	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
143	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代（平安）	
144	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
145	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
146	平面梯川遺跡	集落跡	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
147	平面梯川 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
148	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世	
149	白江堡跡	城館跡	中世（室町）	白江新助景平・景盛居館伝承
150	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
151	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
152	一針遺跡	散布地	縄文	
153	一針 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
154	一針 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
155	定地坊跡	社寺跡	中世（室町）	
156	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
157	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳 6
158	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
159	千代城跡	城館跡	中世（室町）	
160	千代本村遺跡	散布地	古墳	
161	横地遺跡	散布地	縄文	
162	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡（奈良）
163	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
164	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
165	打越遺跡	散布地	古代	
166	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
167	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
168	吉竹 B 遺跡 (吉竹遺跡 19 地区)	散布地	古墳	旧河道の壙跡
169	吉竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
		千木野遺跡	散布地	所在不詳、現存するには現代残土の山
170	千木野 (A) 遺跡	古墳	古墳	方墳 8
		千木野 (B) 遺跡	集落跡	
171	轎生 1 号墳	古墳	古墳	
172	釜谷古墳・釜谷 2 号墳	古墳	古墳	切石横横穴式石室
173	若杉オソボ山 1 号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
174	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一

No	名 称	種 別	時 代	備 考
175	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代（奈良）・中世（鎌倉）	
		その他の墓	古代（平安）	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳8、木芯粘土室
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡6号墳を削平して築いた連房式登窯
176	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
177	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
178	大谷口遺跡	散布地	弥生	
179	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
180	龟山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
181	軽海中世墓群	その他の墓	中世（室町）	集石墓9
182	軽海庵寺	社寺跡	古代（平安）	大興寺伝承地
183	西芳寺遺跡	社寺跡	古代（平安）	西芳寺伝承地
184	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
185	古府遺跡	集落跡	古代（平安）	
186	古府フンド遺跡	散布地	古代（平安）	
187	十九堂山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
188	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
189	古府横穴	不詳	不詳	
190	古府シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
191	南野台遺跡	散布地	縄文	
192	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
193	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
194	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
195	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が荼毘に付された地とされる
196	埴田の虫塚	その他	近世末	害虫の普提供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
197	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	
198	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
199	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
200	埴田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
201	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（室町）	
202	埴田遺跡	散布地	古代	
203	埴田塚	不詳	不詳	
204	埴田後山古墳群	古墳	古墳	円墳9、木棺直葬、木芯粘土室
205	埴田山古墳群	古墳	古墳	円墳12、方墳4
206	御苦提所古墳	古墳	古墳	円墳
207	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山10～12号墳が重複
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓、河田山1号墳の西側に所在
208	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳2、前方後方墳2、円墳22、方墳34、不明1、木棺直葬、木芯粘土室、切石積横六式石室
		河田横穴	横穴墓	地下式坑、河田山54号墳の南に開口
209	河田山1号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群、河田山60号墳の北西斜面に所在
		河田山古窯跡	生産遺跡	不詳
210	河田B遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
211	河田C遺跡	散布地	不詳	
212	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑6、横穴1、不明1、3地点で計8基
213	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴2基
214	上八里横穴群	横穴墓	中世（室町）	横穴11基
215	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
216	上八里A遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
217	上八里B遺跡	散布地	古代（奈良）	
218	上八里C遺跡	横穴墓	古墳	横穴2基
219	上八里D遺跡	散布地	古代（奈良）	
220	上八里1号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
221	上八里2号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
222	谷内横穴	不詳	不詳	
223	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
224	下出地割遺跡	散布地	不詳	
225	佐野A遺跡	散布地	弥生	
226	佐野B遺跡	散布地	古墳	
227	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
228	狭野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
229	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
230	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳7
231	八里向山A遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
232	八里向山B遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
233	八里向山C遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳1、木棺直葬
234	八里向山D遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳2、木棺直葬

No	名 称	種 别	時 代	備 考
235	八里向山E遺跡	散布地	旧石器～繩文	
		古墳	古墳	方墳1
		集落跡	古代	
236	八里向山F遺跡	散布地	繩文	
		古墳	古墳	円墳10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世(室町)	集石墓1、横穴3
237	八里向山G遺跡	散布地	弥生・古代(平安)	
238	八里向山H遺跡	その他の墓	中世(鎌倉)	集石墓群、96基調査
239	八里向山I遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
240	八里向山J遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
241	里川A遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯2、製炭坑約20
242	里川B遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
243	里川C遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
244	里川D遺跡	散布地	繩文	
245	里川E遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
246	里川F遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
247	里川G遺跡	散布地	不詳	
248	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
249	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	古代(平安)～中世	社寺(隆明寺)又は城館伝承地
		生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯(瓦陶兼窯)
250	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
251	立明寺古跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
252	遊泉寺遺跡	散布地	繩文	
253	宮の奥墳墓群	その他の墓	(平安)	墳墓4、3基調査、2号墓は鎌倉時代に経塚に利用された?
254	涌泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
255	涌泉寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇川常徳の居宅跡とも
256	鶴川堡跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川常徳の詰城伝承地
257	鶴川横穴	不詳	不詳	地下式坑?
258	鶴川寺跡	社寺跡	中世	
259	鶴川池古墳	古墳	古墳	
260	鶴川寺跡	社寺跡	中世	
261	鶴川寺跡	経塚	中世	
262	鶴川寺跡	古墳	古墳	
263	鶴川B遺跡	集落跡	古墳～中世	円墳2、木芯粘土室
264	鶴川C遺跡	古墳	古墳	
265	鶴川D遺跡	古墳	古墳	
266	鶴川E遺跡	古墳	古墳	
267	鶴川F遺跡	古墳	古墳	
268	鶴川G遺跡	古墳	古墳	
269	鶴川H遺跡	古墳	古墳	
270	鶴川I遺跡	古墳	古墳	
271	鶴川J遺跡	古墳	古墳	
272	鶴川K遺跡	古墳	古墳	
273	鶴川L遺跡	古墳	古墳	
274	鶴川M遺跡	古墳	古墳	
275	鶴川N遺跡	古墳	古墳	
276	鶴川O遺跡	古墳	古墳	
277	鶴川P遺跡	古墳	古墳	
278	鶴川Q遺跡	古墳	古墳	
279	鶴川R遺跡	古墳	古墳	
280	鶴川S遺跡	古墳	古墳	
281	鶴川T遺跡	古墳	古墳	
282	鶴川U遺跡	古墳	古墳	
283	鶴川V遺跡	古墳	古墳	
284	鶴川W遺跡	古墳	古墳	
285	鶴川X遺跡	古墳	古墳	
286	鶴川Y遺跡	古墳	古墳	
287	鶴川Z遺跡	古墳	古墳	
288	鶴川AA遺跡	古墳	古墳	
289	鶴川AB遺跡	古墳	古墳	
290	鶴川AC遺跡	古墳	古墳	
291	鶴川AD遺跡	古墳	古墳	
292	鶴川AE遺跡	古墳	古墳	
293	鶴川AF遺跡	古墳	古墳	
294	鶴川AG遺跡	古墳	古墳	
295	鶴川AH遺跡	古墳	古墳	
296	鶴川AI遺跡	古墳	古墳	
297	鶴川AJ遺跡	古墳	古墳	
298	鶴川AK遺跡	古墳	古墳	
299	鶴川AL遺跡	古墳	古墳	
300	鶴川AM遺跡	古墳	古墳	
301	鶴川AN遺跡	古墳	古墳	

No	名 称	種 别	時 代	備 考
302	徳久・荒屋遺跡	集落跡	縄文～中世	東大寺領幡生庄比定地
303	下開発遺跡	集落跡	古墳～古代（平安）	東大寺領幡生庄比定地
304	下開発タモンミヤ遺跡	集落跡	古代（平安）～中世	
	下開発茶臼山遺跡	集落跡	縄文・中世	
305	下開発茶臼山古墳群	古墳	古墳	円墳 28、木棺直葬、木芯粘土室
	茶臼山製鉄跡群	生産遺跡	不詳	製鉄炉 8
306	荒屋古墳群	古墳	古墳	円墳 9、方墳 11
307	下徳山 A 遺跡	散布地	古代（奈良末～平安）	
308	下徳山 B 遺跡	散布地	古代（平安）	
309	下徳山 C 遺跡	散布地	不詳	
310	下徳山 D 遺跡	生産遺跡	古代（奈良末）	須恵器窯ほか、能美古窯跡南群 下徳山支群
311	下徳山御陵山古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯ほか、能美古窯跡南群 下徳山支群
312	下徳山杉谷古窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群 下徳山支群
313	和気小しようぶ谷 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
314	和気小しようぶ谷 2 号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
315	和気孤谷遺跡	散布地	古代	
316	上徳山谷山西古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
317	和気後山谷北遺跡	散布地	古代	
318	和気白石古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
319	和気後谷奥遺跡	生産遺跡	古代（平安）	土師器焼成坑、能美古窯跡南群 後山谷支群
320	和気後山谷 1 号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
321	和気後山谷 2 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
322	和気小しようぶ谷遺跡	散布地	古代	
323	和気古窯跡群（和気 1 ～ 3 号窯跡）	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 和気岬山支群
324	下徳山金谷地古窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群 和気岬山支群
325	下徳山トモサダ遺跡	散布地	不詳	
326	和気和田見遺跡	散布地	不詳	
327	和気和田見古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
328	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群
329	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
330	和気矢口 A 遺跡	散布地	縄文	
331	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
332	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
333	虚空藏城跡	城館跡	中世	
334	虚空藏山横穴群	横穴墓	不詳	
335	寺畠古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
336	寺畠薬師坂古墳	古墳	古墳	
337	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
338	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
339	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
340	鍋谷堡跡	城館跡	不詳	
341	金剛寺跡	社寺跡	不詳	
342	金剛寺坂中世墓群	その他の墓	中世	墳墓
343	徳山寺跡	社寺跡	不詳	
344	上徳山 A 遺跡	散布地	古代	
345	上徳山近世窯跡	生産遺跡	近世	製陶
346	湯屋チョウツカ遺跡	その他の墓	中世	墳墓 11
347	辰口庵寺	社寺跡	不詳	
348	辰口遺跡	散布地	縄文	
349	湯屋古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡北群
350	湯屋遺跡	散布地	古墳～古代（平安）	
351	旭台北皆跡	城館跡	中世	
352	旭台南皆跡	城館跡	中世	
353	旭台 A 遺跡	散布地	縄文	
354	旭台 B 遺跡	散布地	古代（平安）	
355	来丸旭台遺跡	散布地	縄文	
356	火釜 A 遺跡	散布地	縄文	
357	火釜 B 遺跡	散布地	古代（平安）	

参考文献(1)

- イ 石川県教育委員会 (1992) 石川県遺跡地図
石川県立埋蔵文化財センター (1986) 漆町遺跡 I
石川県立埋蔵文化財センター (1988) 漆町遺跡 II
石川県立埋蔵文化財センター (1988) 辰口西部遺跡群 I
石川県立埋蔵文化財センター (1988) 白江梯川遺跡 I
石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡 III
石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡 IV
石川県立埋蔵文化財センター (1989) 白江梯川遺跡 II
石川県立埋蔵文化財センター (1989) 蓮代寺地区遺跡 I
石川県立埋蔵文化財センター (1990) 小松市高堂遺跡
石川県立埋蔵文化財センター (1993) 能美丘陵東遺跡群 I
石川県立埋蔵文化財センター (1995) 石川県小松市荒木田遺跡
石川県立埋蔵文化財センター (1997) 能美丘陵東遺跡群 II
石川県立埋蔵文化財センター (1998) 能美丘陵東遺跡群 III
(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群 IV
(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群 V
(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
ウ 上野 與一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
カ 軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77. p201-221., 石川県
コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (1992) 銭畠遺跡 I, 石川県
小松市教育委員会 (1993) 銭畠遺跡 II, 石川県
小松市教育委員会 (1999) 林タカヤマ窯跡, 石川県
小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群, 石川県
小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 千代才オキダ遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と莊園, 小松市, 石川県
タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2005) 和氣後山谷窯跡群, 石川県能美市
テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1400., 石川県
日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

II 調査の概要

1 調査に至る経緯

県営ほ場整備事業犬丸梯地区のうち、今回調査に係る梯町地内について計画の時点では錢畠遺跡が事業区域の一部に含まれる事は周知のものだったが、石川県教育委員会事務局文化財課（以下、県文化財課）が平成 19 年度に実施した試掘調査の結果、区域内に錢畠遺跡の他にもう 1 箇所埋蔵文化財包蔵地が存在することが確認され、後者は「梯遺跡」として周知された。埋蔵文化財の具体的な取り扱いについては、再度詳細な試掘調査を実施して埋蔵文化財包蔵地の範囲を決定した上で、ほ場整備の設計とつきあわせて詳細を詰めていく事とし、当該事業を担当する石川県南加賀農林総合事務所（以下、県農林）と県文化財課との間で協議が継続される事となった。

2 度目の試掘調査は平成 22 年度に実施された。この結果、文化財保護法に基づく保護措置を必要とする範囲を決定し、ほ場整備の設計とつきあわせたところ、新設される道路 3 号に沿う用水路 4 号が埋蔵文化財包蔵地の範囲内に敷設されるため、発掘調査を実施する事となった。錢畠遺跡は用水路の敷設される範囲を、梯遺跡は用水路の最下流に位置するために保護層の確保が難しいとして事業区域内の全域を調査対象とし、後者については事業区域外に接続する用水路 6 号も調査範囲に含まれた（図 4）。なお、この時点で用水路 4 号は道路 3 号のどちら側に敷設するか流動的であったため、調査範囲は道路 3 号の両側に設定されている（図 4）。

県営ほ場整備事業に係る発掘調査は、小松市埋蔵文化財センター（以下、市埋文）が受託して実施するものとして取り扱われることになっており（平成 16 年 9 月 9 日付け通知「埋蔵文化財発掘調査等に係る県及び市町村の役割分担について」）、ほ場整備事業の農家負担 10% 相当分は国庫補助対象として対応するものとして、県農林と市埋文の間で、平成 23 年 4 月 28 日付けで委託契約を締結して着手する運びとなった。

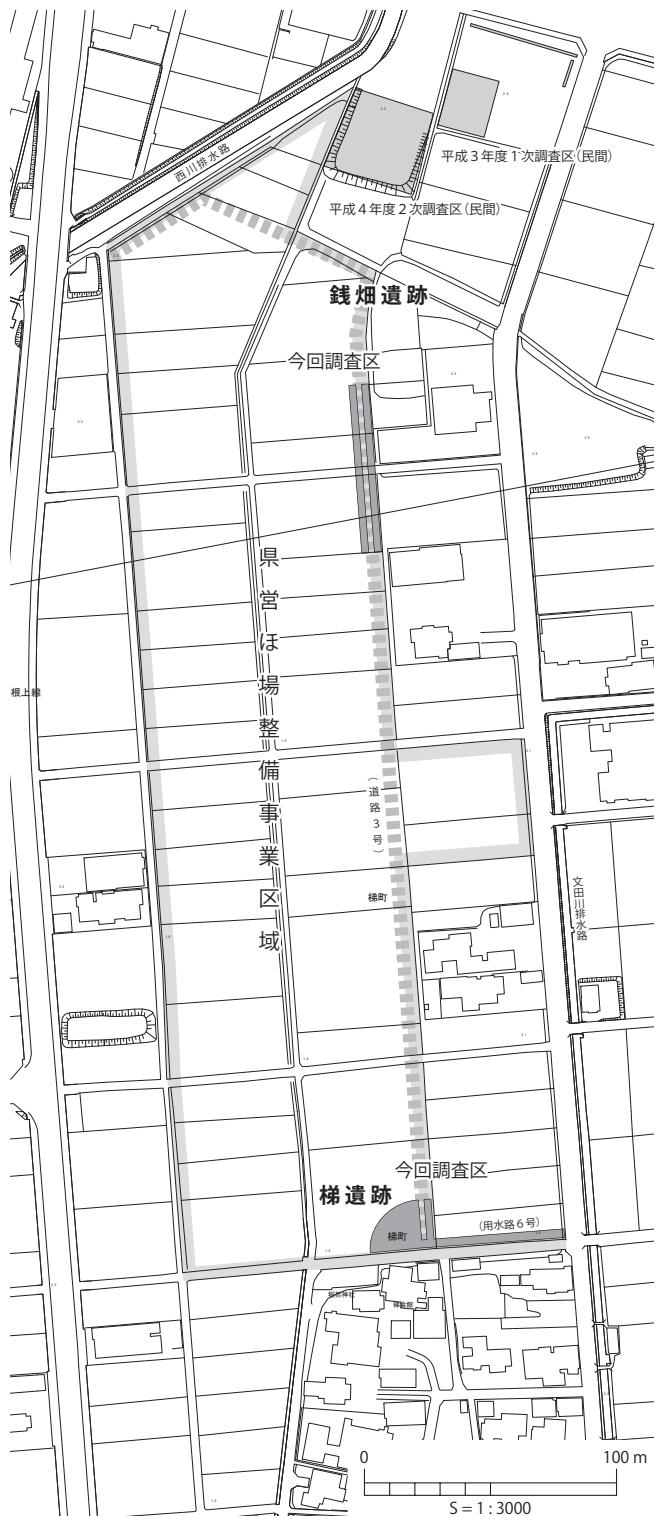


図 4 調査区の位置

2 調査の経過

発掘調査はまず道路3号西側及び用水路6号617m²について6月6日より着手した。図5に今回調査の基本層位を示したが、当該事業区域は明治末から大正時代の耕地整理の初期の段階に施工された区域に含まれており、既に遺物包含層が失われた状態であった。加えて遺構密度は予想より希薄であったため、着手前の見積もりよりも早く進捗した。8月12日に全ての作業を完了し、617m²分について調査完了した旨文書で通知した上で、別件調査のために一旦現場を県農林に引き渡した。

道路3号東側225m²の発掘調査は、別件調査完了後の11月7日に着手した。この時点で完了分の調査により概要が把握できていたために作業は更に進捗し、11月28日までに全ての作業を完了した。

3 出土品整理

発掘調査完了後、県農林と市埋文とのあいだで出土品整理から報告書刊行までの計画について協議をもち、今調査の記録量が少ない事、出土品が少ない事、市埋文の翌年度のスケジュールなどを総合的に判断した結果、本年度内に報告書刊行まで完了することが最良との結論に達し、取り急ぎ予算処置などの調整をした上で、12月22日付けで出土品整理について委託契約を締結し、明けて平成24年1月5日より着手した。本報告は、編集と印刷製本に掛かる日数を確保するため出土品の図化を最優先としているため、本来先に行うべき作業の一部（主に記名作業）を入稿後に残すなどの措置を講じている。

III 錢畠遺跡の調査

1 調査の概要

調査区内は、耕地整理の整地層の直下に地山が検出される状況であり（図5）、遺構覆土には黒～黒褐色砂壤土（以下、クロスナ）が普遍的に認められる状況から、少なくとも耕地整理以前には、周辺一帯はクロスナ層に覆われ、これが遺物包含層であったと推定される。

クロスナ層から最も普遍的に出土するのは弥生土器であり、調査開始当初の数日間は、弥生時代の集落にあたったのではないかと考えたほどであったが、遺構覆土を掘削すると中世の遺物が出土するので、今調査で検出された遺構は主に中世のものと考えられ、弥生土器の出土のあり方については、普遍的に混入しているという状況を考えるのが妥当だろう。

また、調査区は南北端で地山の検出される標高が低く、それぞれ旧河川と思われる砂層を挟む泥層が認められることから、調査区は、蛇行して南流する小河川の右岸にあたり、平成3・4年度調査区とは、川の対岸にあたる位置関係となるようだ（図4）。

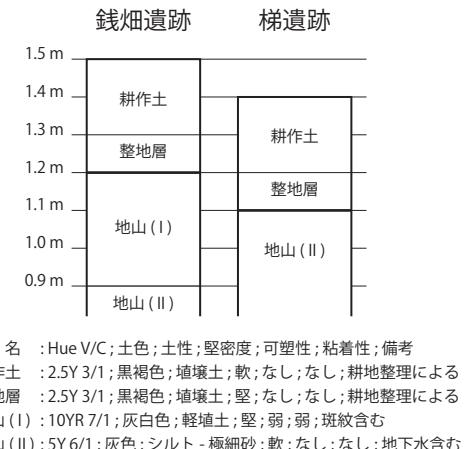


図5 土層柱状図

2 検出された遺構

1) 井戸 (図版2)

SK02・SK05 地山(II)に板を打ち込んで井戸側としたもの。板の寸法はまちまちで、二重に打ち込まれている。地下水に満たされた地山(II)は液状化した状態であり、井戸側はこれに押されるような格好で、内向きにひしゃげた状態で検出された。

SK03・SK04 明確な井戸側は認められないが、円筒状の掘方がSK02と類似しており、井戸の可能性がある。SK03については、打ち込まれた板が一枚だけ検出された。

2) その他の土坑 (図版3～4)

SK09・SK18 すりばち 撥鉢状の掘方が地山(II)に達し、さらに円筒状に掘り進む土坑。井戸を掘ったのであれば結桶か曲物を埋め込まないと機能しないと思われるが、そのような痕跡は認められない。

SK01・SK21 撥鉢状の掘方が地山(II)に達しない土坑。

SK08・SK10・SK15～SK17 広く浅く掘り下げた土坑。下端はほぼ平坦で、掘方は地山(II)に達しない。

SK22 広く浅く掘り下げた土坑のうち、プランが特に大きいもの。他のすべての遺構と異なり、SK22だけは覆土にクロスナ層がなく、土性は地山(I)に近い。

3) 並行する溝 (図版5)

SD01・SD02 どちらも、検出面で上端で幅60cmの深い溝である。約2mの間隔で並行していることから、側溝を備えた道路遺構の可能性がある。

3 出土遺物

1) 弥生土器 (図版6—1～17)

1～5は弥生中期の土器である。2～4は八日市地方9～10期に比定され中期後葉、1はこれよりも時期が遡るかもしれない。

6～17は弥生後末期の土器である。甕形土器の有段口縁の特徴で見れば法仏期から白江期までの資料を含む。

2) 須恵器 (図版6—18～30)

18～23は食膳具(環・盤)、24は窯道具(焼台)、25～30は貯蔵具(瓶類・甕)である。20～23・30は、暗色で砂粒が少ない印象を受ける特徴から能美窯、他は淡色で砂粒が多い印象を受ける特徴から南加賀窯の製品と思われる。

環Hの18は古代I期の範疇で7世紀前半、環Aの19は古代IV期の範疇で8世紀後半、環Aの20と盤Aの21・22は古代V期の範疇で9世紀前半に概ね比定される。

3) 土師器 (図版7—31～49)

すべて皿で、31～33はロクロ系、34～49は非ロクロ系である。36は外面に帶状に、47・48は口縁部に油煤の付着がある。

31～34は銭畠遺跡1次5号溝に類似資料が認められ、12世紀末に比定される。35～49は銭畠遺跡1次6号溝に類似資料が認められ、16世紀前半に比定される。

4) 灰器・陶磁器 (図版7—50～57)

灰器は、瓷器系の50～53のうち、50・51は加賀窯、他は越前窯の製品である。須恵器系の54・55は珠洲窯の製品である。口縁部の特徴から、加賀は14世紀後半、越前は14世紀前半～15

世紀前半、珠洲は13世紀後半～15世紀前半に比定される。

陶磁器は、56が古瀬戸の大皿、57が青磁の碗である。古瀬戸は後III期の範疇で15世紀前半に比定され、青磁は龍泉窯系で、口縁部に雷文が施されており、14世紀後半のものと思われる。

5) その他の遺物（図版7—58～62）

58は瓦質土器の角形火鉢であり、口縁部は菱形文のスタンプで加飾されている。

59は漆器の椀であり、全面黒漆で、見込みにユリと思われる図柄が朱漆で描かれている。

60は木製の箸である。

61は石製の行火であり、方形で横置きにするタイプである。

62は両面加工された打製石器で、明確ではないが石錐と思われる。弥生中期の土器が出土していることから、この時期の石器と思われる。

IV 梯遺跡の調査

1 調査の概要

調査区内は、耕地整理の整地層の直下に地山が検出される状況であり（図5）、遺構覆土にはクロスナが普遍的に認められる状況から、少なくとも耕地整理以前には、周辺一帯はクロスナ層に覆われ、これが遺物包含層であったと推定される。地山に関しては、錢畠遺跡で認められた地山（I）の埴土層が欠落している状況であり、^{かくらん}攪乱坑の埋土ではこれがクロスナに混じって認められることから、梯遺跡の地点では地山（I）まで整地によって失われたと考えられる。

また、梯遺跡の地点では、地山面が緩やかに北東に傾斜しているよう、用水路6号の調査区で旧河川とした溝状の凹みの周辺では埴土～シルト質の地山層が認められ、印象でいえば、地山（I）が黒ずんだ堆積層に見える。

調査区内の状況については、特に道路3号西側の区域では攪乱の影響が3分の1程度に及び、特に大きなものは耕地整理関連の土木工事跡と見られる。また、図版8に「暗渠」と「二カ穴」と表示しているところは糰殻（ニカ）が詰めてあった攪乱坑で、水田の暗渠排水の方法として一般的なものと認識していたが、地元の梯町ではこれについては誰も知らないとのことだった。梯町周辺では地下水が田面までしばしば染み出すほど地下水位が上昇することがあり、地下水を含む地山（II）を暗渠にしても期待した排水効果が得られなかった可能性があり、「暗渠」も現在の区画と方向が違うことから、おそらく耕地整理以後は行われなかつたのだろう。

遺構は上述の攪乱の間隙で検出される状況であり、錢畠遺跡の場合と同様に覆土にはクロスナ層が認められ、弥生土器を包含していた。こればかりでなく、遺構・遺物ともに錢畠遺跡と内容がよく似ており、今調査に係る両遺跡は性格のよく似た遺跡であることが窺われる。

2 検出された遺構

1) 井 戸（図版9）

SK01・SK02 地山（II）に結桶を埋設して井戸側としたもの。どちらも、結桶は少なくとも2段重ねられていたと見られ、上段部分は、SK01では樽板の一部が、SK02では竹製の籠のみ（写真図版6）が検出された。

表2 錢畠遺跡 出土遺物属性表

図版	番号	実測	出土位置	分類	器種	寸法 / 残率	表層色調	胎土色調	備考
6	1	P14	K区 撤乱	弥生土器	甕	口: 18cm/0.083	10YR 8/2	10YR 4/1	弥生中期
	2	P01	SK02	弥生土器	甕	口: 24cm/0.083, 頸: 22cm/0.083	10YR 7/3	10YR 8/3	弥生中期
	3	P02	SK03	弥生土器	甕		10YR 8/3	10YR 6/1	弥生中期
	4	P03	SK05	弥生土器	壺	頸: 13cm/0.153	10YR 8/2	10YR 4/1	弥生中期
	5	P04	SK03	弥生土器	壺	底: 7cm/0.389	7.5YR 5/1(黒斑)	5YR 5/1	弥生中期
	6	P05	SK14	弥生土器	甕	口: 20cm/0.125, 頸: 18cm/0.125	10YR 8/3	10YR 4/1	弥生後期(法仏)
	7	P07	SD02	弥生土器	甕	口: 20/0.083, 頸: 17cm/0.042	10YR 8/3	10YR 8/2	弥生後期(法仏)
	8	P15	I2区	弥生土器	甕	口: 21cm/0.417, 頸: 17cm/0.083	10YR 6/3	10YR 5/1	弥生後期(法仏)
	9	P08	SK05	弥生土器	甕	口: 20cm/-, 頸 17cm/0.069	10YR 7/3	10YR 8/2	弥生後期(法仏)
	10	P06	SK09	弥生土器	甕	口: 18cm/0.125, 頸: 15cm/0.222	5YR 4/1	7.5YR 4/1	弥生末(月影)
	11	P10	SK14	弥生土器	甕	口: 19cm/-, 頸: 16cm/0.097	10YR 8/3	10YR 5/1	弥生末(白江)
	12	P09	SK12	弥生土器	甕	口: 17cm/0.056, 頸: 14cm/0.083	7.5YR 8/3	7.5YR 8/2	弥生末(白江)
	13	P12	SK12	弥生土器	壺	口: 11cm/0.222	10YR 7/3	10YR 5/1	弥生後期(法仏)
	14	P11	SK10	弥生土器	甕	底: 3cm/1.000	7.5YR 7/3	7.5YR 8/2	弥生後期(法仏)
	15	P16	K区 撤乱	弥生土器	高坏		10YR 7/3	10YR 5/1	弥生後期(法仏)
	16	P13	SK11	弥生土器	高坏		10YR 8/2	10YR 6/1	弥生末
	17	P17	I区	弥生土器	高坏		10YR 6/6	2.5YR 7/3(二次被熱)	弥生後期(法仏)
	18	Y01	SK05	須恵器	环 H	受: 14cm/-, 口: 16cm/0.056	5P 7/1	N 6/0	7c 前半
	19	Y13	G区	須恵器	环 A	口: 13cm/0.222, 底 10cm/0.528, 高: 3.5cm	2.5Y 7/1	2.5Y 7/1	8c 後半
	20	Y02	SK02	須恵器	环 A	口: 14cm/0.208, 底: 9cm/0.167, 高: 2.9cm	N 6/0	N 6/0	9c 前半
	21	Y03	SK05	須恵器	盤 A	口: 16cm/0.056, 底: 13cm/0.083, 高: 2.0cm	N 6/0	N 6/0	9c 前半
	22	Y14	A2区 旧河川	須恵器	盤 A	口: 15cm/0.167, 底: 12cm/0.194 高: 1.7cm	N 5/0	N 5/0	9c 前半
	23	Y04	SK04	須恵器	環 B	台: 7cm/-, 台高: 0.4cm	N 6/0	N 6/0	
	24	Y05	SK08	須恵器	焼台	口: 16cm/-, 底: 14cm/0.111, 高: 3.3cm	5RP 7/1	N 6/0	
	25	Y06	SK12	須恵器	瓶	胴: 20cm/0.125	5RP 7/1	N 6/0	
	26	Y18	SK04	須恵器	甕	口: 24cm/0.056	2.5Y 7/1	2.5Y 8/1	
	27	Y17	K区 撤乱	須恵器	甕		2.5Y 8/1	2.5Y 7/1	
	28	Y15	K2区	須恵器	甕		N 7/0	N 7/0	
	29	Y07	SK04	須恵器	甕		N 6/0	N 6/0	
	30	Y16	K区 撤乱	須恵器	甕		N 5/0	5Y 7/1	
7	31	R02	SK05	土師器	III	底: 6cm/0.167	10YR 8/2	10YR 8/1	口クロ系(12c末)
	32	R01	SK17	土師器	III	口: 8cm/0.472, 底: 5cm/1.000, 高: 2.0cm	10YR 8/3	10YR 8/2	口クロ系(12c末)
	33	R03	SK18	土師器	III	口: 8cm/0.194, 高: 2.3cm	5YR 6/6	10YR 8/2	口クロ系(12c末)
	34	R04	SK05	土師器	III	口: 9cm/0.278, 高: 1.4cm	7.5YR 8/4	7.5YR 8/4	非口クロ系(12c末)
	35	R05	SK22	土師器	III	口: 7cm/0.333, 高: 2.0cm	5YR 8/4	7.5YR 7/4	非口クロ系(16c前半)
	36	R06	SK22	土師器	III	口: 7cm/0.694, 高: 1.8cm	7.5YR 7/3	7.5YR 7/3	非口クロ系(16c前半), 外面油煤
	37	R07	SK22	土師器	III	口: 7cm/0.389, 高: 1.8cm	7.5YR 8/3	7.5YR 8/3	非口クロ系(16c前半)
	38	R08	SK04 上	土師器	III	口: 7cm/0.305, 高: 2.0cm	7.5YR 8/4	7.5YR 8/4	非口クロ系(16c前半)
	39	R09	SK22	土師器	III	口: 8cm/0.222, 高: 2.1cm	10YR 8/2	10YR 7/3	非口クロ系(16c前半)
	40	R10	G2区	土師器	III	口: 8cm/0.194, 高: 2.0cm	10YR 7/2	10YR 7/1	非口クロ系(16c前半)
	41	R19	SK04	土師器	III	口: 8cm/0.194, 高: 2.4cm	10YR 8/2	10YR 8/2	非口クロ系(16c前半)
	42	R12	SK22	土師器	III	口: 9cm/0.431, 高: 2.5cm	10YR 8/3	10YR 8/1	非口クロ系(16c前半)
	43	R14	SK22	土師器	III	口: 9cm/0.194, 高: 2.3cm	7.5YR 8/3	10YR 8/2	非口クロ系(16c前半)
	44	R15	SK22	土師器	III	口: 9cm/0.208, 高: 2.6cm	10YR 6/2	10YR 6/2	非口クロ系(16c前半)
	45	R16	SK22	土師器	III	口: 9cm/0.222	7.5YR 8/3	10YR 8/1	非口クロ系(16c前半)
	46	R13	SK22	土師器	III	口: 11cm/0.222, 高: 2.0cm	7.5YR 8/4	10YR 8/3	非口クロ系(16c前半)
	47	R11	SK22	土師器	III	口: 10cm/1.000, 高: 2.5cm	10YR 8/3	10YR 7/3	非口クロ系(16c前半), 口縁油煤
	48	R17	M区	土師器	III	口: 11cm/0.139, 高: 2.9cm	10YR 7/2	10YR 8/1	非口クロ系(16c前半), 口縁油煤
	49	R18	SK04	土師器	III	口: 11cm/0.056, 高: 2.5cm	7.5YR 8/3	7.5YR 8/3	非口クロ系(16c前半)
	50	Y10	SK05	炻器	甕		2.5Y 6/3	10YR 6/1	加賀(14c後半)
	51	Y11	J2区	炻器	甕		2.5Y 7/1	2.5Y 7/1	加賀(14c後半), 押印
	52	Y20	N区	炻器	甕		7.5YR 5/3	7.5YR 6/2	越前(15c前半)
	53	Y19	B区	炻器	甕	口: 50cm/0.097	7.5YR 6/3	7.5YR 6/2	越前(14c前半)
	54	Y09	SK22	炻器	甕		N 6/0	N 7/0	珠洲(13c後半)
	55	Y08	SK04	炻器	擂鉢	口: 30cm/0.069	N 6/0	N 6/0	珠洲(15c前半)
	56	Y21	A2区 旧河川	陶磁器	大III	口: 34cm/0.069	7.5YR 5/3(灰釉)	2.5Y 6/1	古瀬戸(15c前半)
	57	Y12	SK22	陶磁器	碗	口: 14cm/0.111	10YR 6/2(青磁釉)	N 7/0	青磁(14c後半)
	58	Y22	A2区 旧河川	瓦質土器	火鉢		10YR 5/1	10YR 8/2	角形
	59	G03	SK22	漆器	椀	台: 7.5cm/1.000, 台高: 0.5cm			
	60	G02	SK03	木製品	箸	長: 17.9cm, 幅: 0.6cm, 厚: 0.6cm			
	61	G04	SK04	石製品	行火	長: 9.5cm, 幅: 16.3cm, 高: 15.2cm, 重: 952.4g			凝灰角礫岩
	62	G01	J区	石器	石錐	長: 3.9cm, 幅: 1.6cm, 厚: 0.9cm, 重: 5.18g			チャート

※ 実測番号の記号は番号シールの色であり、G: 緑色、P: 桃色、R: 赤色、Y: 黄色である。

SK05 地山(II)に板を打ち込んで井戸側としたもの。板の寸法はまちまちで、二重に打ち込まれている。地下水に満たされた地山(II)は液状化した状態であり、井戸側はこれに押されるような格好で、内向きにひしゃげた状態で検出された。また、この上部に井桁状に横板が検出されたが、大部分が腐食によって失われて完全に遊離した状態であり、組まれたものか不明である。

SK08 地山(II)に曲物を埋設して井戸側としたもの。

2) その他の土坑(図版10)

SK04 今調査で唯一、整地層下に帶状に残っていたクロスナ層の下位に検出された遺構である。
地山(II)を擂鉢状に掘り込む土坑。地山(I)でのプランは不明瞭であり、旧河川の浸食・再堆積の影響を受けている可能性がある。出土遺物はすべて弥生土器であり出土量も多く、覆土にクロスナ層が不明瞭なことから他の遺構より下位の層準と考えられ、弥生時代の土坑である可能性が高い。

SK06 地山(II)を擂鉢状に掘り込む土坑。覆土に大小の地山(I)ブロックを含み、円筒状に掘り込んだ掘方が地山(II)に到達したものと思われる。地山(II)をそれほど深くは掘削しておらず、覆土の状況を見る限り、掘削後ほとんど期間を置かずに埋め戻されたようだ。

SK07・SK09 地山(II)を擂鉢状に掘り込む土坑。掘削後ある程度の期間、開口したままの状態だったと思われ、特にSK07はセクションに土砂が流れ込んだ状況が看取された。

3 出土遺物

1) 弥生土器(図版11-1~16)

1~4は弥生中期の土器である。1・2は八日市地方9~10期に比定され中期後葉、2は受口状口縁と櫛描きの直線文から近江系と思われる。

5~16は弥生後末期の土器である。甕形土器の有段口縁の特徴は月影期のもので、16は赤彩された小型器台で白江期のものだろう。他は、器種不明の13を除き、壺・鉢・高坏は法仏期と思われる。

2) 土師器(図版11-17~21)

すべて皿で、非口クロ系である。17は口縁部に油煤の付着がある。

17~20は銭畠遺跡1次6号溝に類似資料が認められ、16世紀前半に比定される。21は、金沢市木ノ新保遺跡の土器皿I1類に類似し、17世紀前半に比定される。

3) 灰器・陶磁器(図版11-22~30・図版12-34~43)

灰器は、瓷器系の22~37すべて越前窯の製品であり、須恵器系の38・39は珠洲窯の製品である。口縁部の特徴から、越前は14世紀前半~16世紀後半、珠洲は14世紀~15世紀後半に比定される。なお、27~30は、越前の甕片を略円形に調整したものである。

陶磁器は、40・41が古瀬戸の折縁深皿、42・43が青磁の碗である。古瀬戸は後II期の範疇で14世紀末(~15世紀初頭)に比定され、青磁は龍泉窯系で、口縁部に雷文が施されており、14世紀後半のものと思われる。

4) その他の遺物(図版11-31~33・図版12-44~52)

31~33は土錘である。

44は漆器の椀である。内面は全面に朱漆が塗られ、外面に朱漆でウメと思われる図柄が施される。あるいは、前田氏の家紋である梅鉢紋か。

45~48は石鉢である。45は片口付で、46は筒形の器形であり、内面にノミ痕が著しい。46は、あるいは行火の破片かもしれない。47・48は底部の破片で、どちらも内面は平滑である。48は外側のノミ痕が著しい。

49は紡錘車である。

50は下駄である。長さは実測で14.3cmを測り、幼い子供用であろう。歯は脱落していて、これを止めていたと思われる目釘穴が確認できる。

51は砥石である。

52は石臼の上臼である。下臼と接続する芯棒受けの部分で割れている。

表3 梯遺跡 出土遺物属性表

図版	番号	実測	出土位置	分類	器種	寸法 / 残率	表層色調	胎土色調	備考
11	1	P01	SK05	弥生土器	壺	口: 21cm/0.069, 頸: 18cm/0.111	10YR 7/3	10YR 6/1	弥生中期
	2	P02	SK04	弥生土器	壺	口: 18cm/0.194, 頸: 15cm/0.056	10YR 8/3	10YR 6/1	弥生中期
	3	P03	SK04	弥生土器	壺	底: 6cm/0.306	10YR 7/3	10YR 7/2	弥生中期
	4	P07	SK04	弥生土器	壺	口: 15cm/0.111, 頸: 14.5cm/0.125	10YR 7/2	10YR 8/2	弥生中期
	5	P06	SK04	弥生土器	壺	口: 18cm/0.139, 頸: 14.5cm/0.167	10YR 8/3	10YR 8/2	弥生末(月影)
	6	P04	SK04	弥生土器	壺	口: 17cm/0.125, 頸: 14cm/0.153	10YR 7/2	10YR 5/1	弥生末(月影)
	7	P05	SK04	弥生土器	壺	口: 18cm/0.069, 頸: 15cm/0.069	7.5YR 7/3	7.5YR 8/2	弥生末(月影)
	8	P08	SK04	弥生土器	壺	口: 8cm/0.333, 頸: 6cm/0.167	10YR 7/3	10YR 5/1	弥生後期(法仏)
	9	P10	SK04	弥生土器	壺	頸: 8cm/0.139	10YR 7/2	10YR 5/1	弥生後期(法仏)
	10	P09	SK04	弥生土器	壺	頸: 10cm/0.167	5YR 6/3	10YR 4/1	弥生後期(法仏)
	11	P11	SK04	弥生土器	壺	口: 14cm/0.056	10YR 7/3	10YR 8/2	弥生後期(法仏)
	12	P12	SK04	弥生土器	鉢	口: 17cm/0.083, 頸: 14cm/0.097	10YR 7/3	10YR 5/1	弥生後期(法仏)
	13	P13	D-10区	弥生土器		口: 12cm/0.194	10YR 7/3	10YR 5/1	弥生後期
	14	P14	SK04	弥生土器	高坏		10YR 7/3	10YR 8/2	弥生後期(法仏)
	15	P15	SK04	弥生土器	高坏		10YR 8/2	N 3/0	弥生後期(法仏)
	16	P16	SK03	弥生土器	小型器台		2.5YR 6/6(赤彩)	7.5YR 6/3	弥生末(白江)
12	17	R01	D-9区	土師器	皿	口: 7.5cm/1.000, 高: 2.0cm	7.5YR 7/3		非口クロ系(16c前半), 口線油煤
	18	R03	D-9, D-10区 旧河川	土師器	皿	口: 8cm/0.167, 高: 2.3cm	7.5YR 8/3	7.5YR 8/2	非口クロ系(16c前半)
	19	R02	D-9区	土師器	皿	口: 10cm/0.167, 高: 2.3cm	10YR 8/2	10YR 8/2	非口クロ系(16c前半)
	20	R04	SK07	土師器	皿	口: 10cm/0.139	7.5YR 7/3	7.5YR 7/3	非口クロ系(16c前半)
	21	R05	D-11区	土師器	皿	口: 11cm/0.194, 高: 2.1cm	10YR 8/2	7.5YR 7/4	非口クロ系(17c前半)
	22	Y07	B-4区 捣乱	炻器	甕		2.5Y 4/1	2.5Y 7/1	越前(14c前半)
	23	Y08	A-3区 捣乱	炻器	甕		7.5YR 5/2	2.5Y 6/1	越前(14c後半)
	24	Y09	A-3区 捣乱	炻器	甕	口: 52cm/0.097, 頸: 46cm/0.111	7.5YR 4/2	2.5Y 6/1	越前(16c前半)
	25	Y10	A-4区 捣乱	炻器	甕		10R 6/6	2.5Y 6/2	越前(16c前半)
	26	Y11	B-3区 捣乱	炻器	甕		7.5YR 4/1	N 6/0	越前(16c後半)
	27	G04	C-4区 暗渠	炻器片	円形陶片	長径: 3.5cm, 短径: 2.9cm, 厚: 0.8cm, 重: 16.48g	5YR 5/4	2.5Y 5/1	越前
	28	G05	D-9, D-10区 旧河川	炻器片	円形陶片	長径: 3.0cm, 短径: 2.8cm, 厚: 0.8cm, 重: 14.36g	2.5Y 6/2	2.5Y 5/1	越前
	29	G06	C-4区 暗渠	炻器片	円形陶片	長径: 2.6cm, 短径: 2.6cm, 厚: 0.7cm, 重: 9.48g	5YR 4/2	2.5Y 7/1	越前
	30	G07	C-4, D-4区 試掘跡	炻器片	円形陶片	長径: 2.9cm, 短径: 2.6cm, 厚: 0.6cm, 重: 9.21g	2.5YR 4/2	2.5Y 5/1	越前
	31	G01	C-3区 捣乱	土製品	土鍤	長: 5.0cm, 径: 4.7cm, 孔径: 2.0cm, 重: 77.52g	10YR 7/3		
	32	G02	D-3, D-4区 捣乱	土製品	土鍤	長: 4.0cm, 径: 6cm/0.222, 孔径: 2.5cm/0.222, 重: 12.48g	7.5YR 8/4	7.5YR 8/4	
	33	G03	D-2区	土製品	土鍤	長: 3.9cm, 径: 2.7cm, 孔径: 0.8cm, 重: 18.44g	7.5YR 7/3	7.5YR 8/3	

* 実測番号の記号は番号シールの色であり、G: 緑色、P: 桃色、R: 赤色、Y: 黄色である。

V 結語

今調査では、銭畠遺跡の南北端と梯遺跡の東側に旧河川の堆積層が認められた。後者に一部礫層が確認された他はすべて泥質の堆積層であり、流れの弱い蛇行した河川であったと考えられる。今調査時点で整地層との境界が曖昧であり、確認できる情報はないが、現在の文田川排水路が整備されたときまでには埋め立てられたと推定される。

現在の梯町地内の水田は、手取扇状地方面から宮竹用水によって灌漑されており、その最下流部に位置する。用水路は南流してそのまま梯川に排水されるが、水田からの排水は、今調査における銭畠遺跡と梯遺跡のちょうど中間地点に集められて文田川排水路に排水されており、現在の水田は、この周辺で大掛かりな嵩上げが行われた可能性がある。用水路の最下流に位置する梯遺跡で、本文中の地山(I)の埴土層が欠落しているのはこうした土木工事の影響かもしれないが、これについて確認できる情報は管見に入らなかった。ただ、梯町の集落内で過去に井戸を掘ったときなどの所見によれば、地山(I)に相当する埴土層が存在することが窺われる所以、これを傍証したい。

以上をふまえて今調査の結果について述べると、まず、本文中でも触れたが、銭畠・梯両遺跡出土遺物の内容がよく似ていることが挙げられる。旧河川の右岸に立地する位置関係も共通しているが、両遺跡間には低湿地が広がっていたようだ。付近に「大島」「小島」との地名があるが、これなどは低湿な土地に微高地が点在する景観の名残と見られるので、両遺跡は、集落として別々の微高地に立地していたと思われる。今調査における両遺跡で、確認できる最古の土器が弥生中期後葉という共通点から、この頃から、あるいは弥生後期の頃までに、低湿地に点在する微高地に集落が立地する景観を形成しつつあったようだ。銭畠・梯両遺跡はそれぞれ別個に集落を形成した遺跡であろう。

今調査では、生活領域としての明確な遺構は井戸のみであったが、出土遺物から見て14世紀から16世紀ごろ、室町時代の集落の一部と認識している。

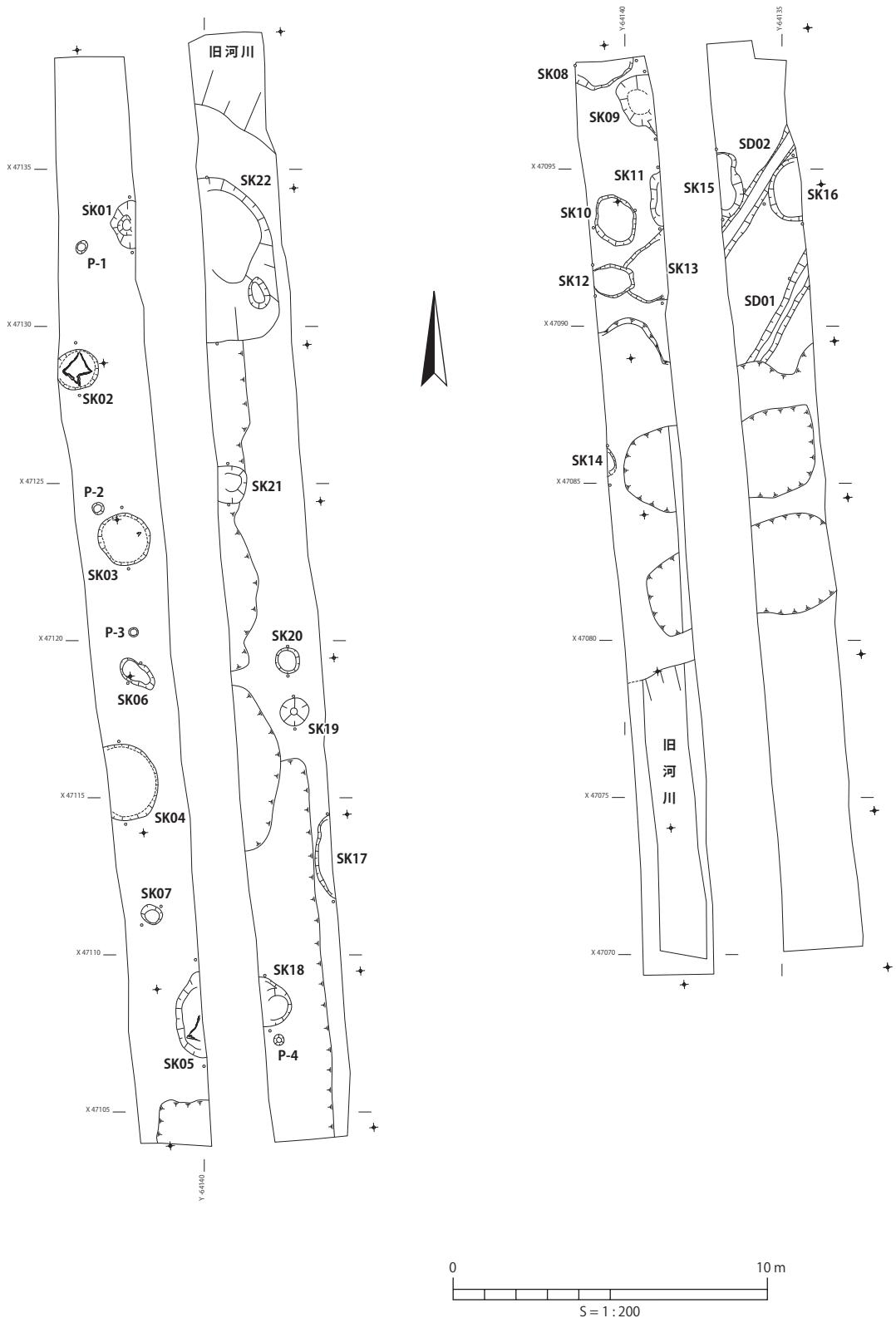
銭畠遺跡に関しては、もともと居館としての伝承もあることからこれの一部の可能性もあるが、この伝承がある場所との間に河川の存在を窺わせるために、今調査に係る区域は、周知の銭畠遺跡とは別の集落を形成していた可能性がある。この前提に立てば、今調査区には近世以降の遺物の出土はなく、16世紀に廃絶した遺跡といえそうだ。

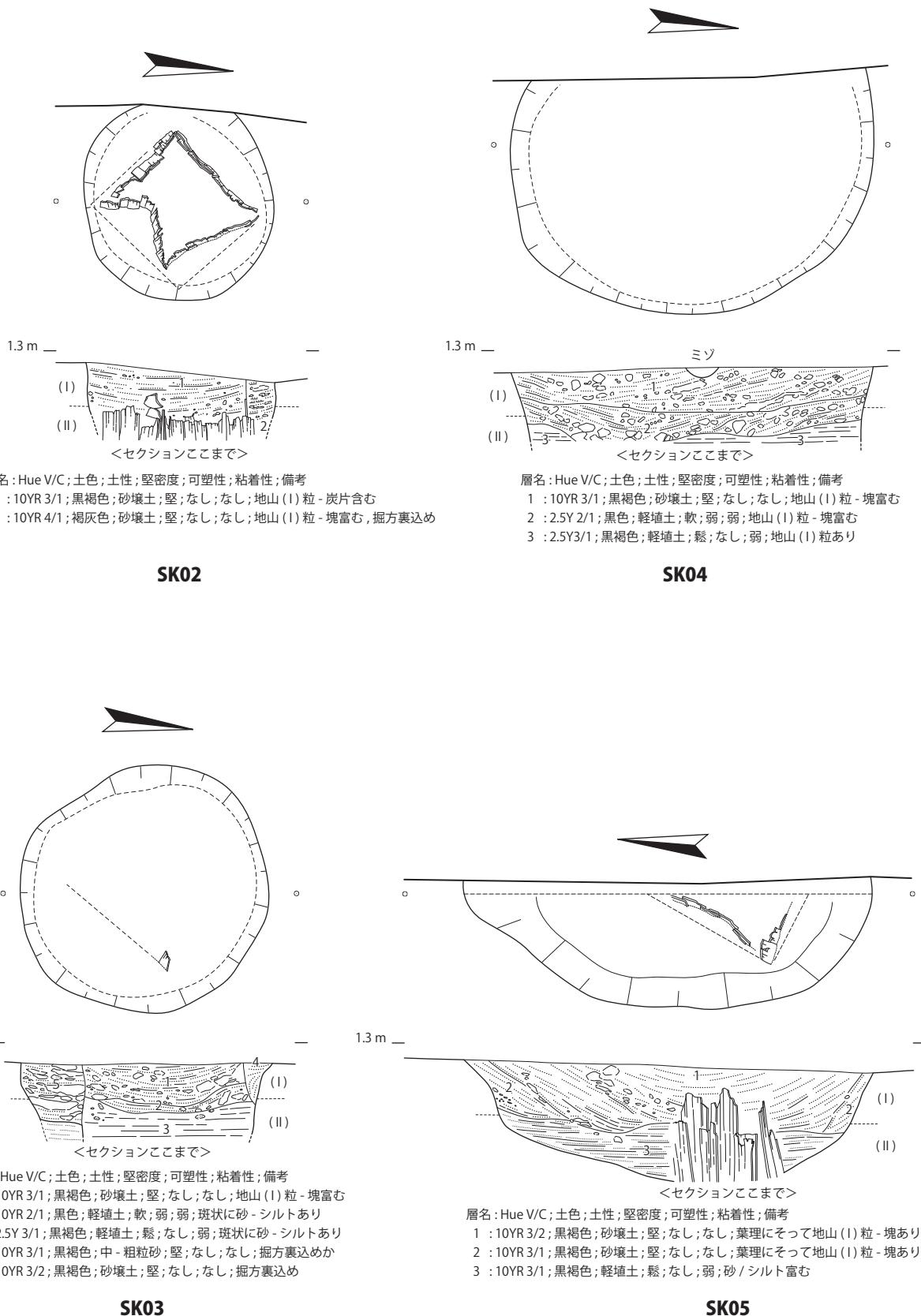
一方の梯遺跡は、室町時代の集落の一部と思われる点は銭畠遺跡と共通する。本報告で割愛しているが、近世小松城下町成立以降の陶磁器も攬乱坑からは出土しており、現在の梯町集落との間には集落領域としての断絶期間が明瞭ではなく、近世にも集落が継続している可能性がある。今調査の範囲に限れば、概ね近世小松城下町成立頃までは生活領域の一部であったが、これ以後に農地として開墾されたと考えられる。

参考文献(III - IV)

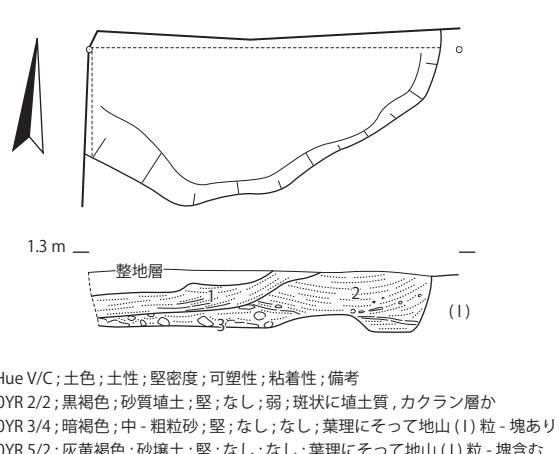
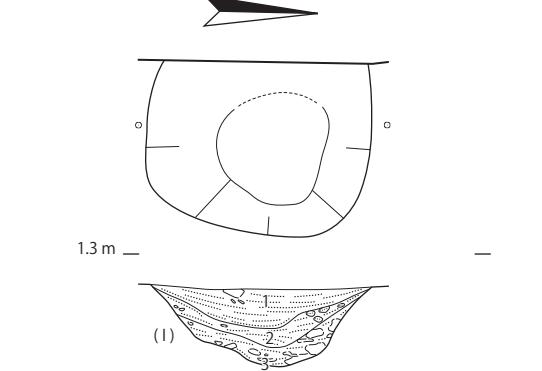
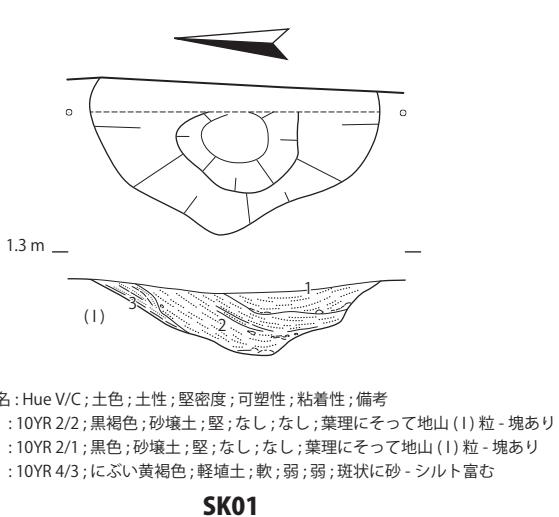
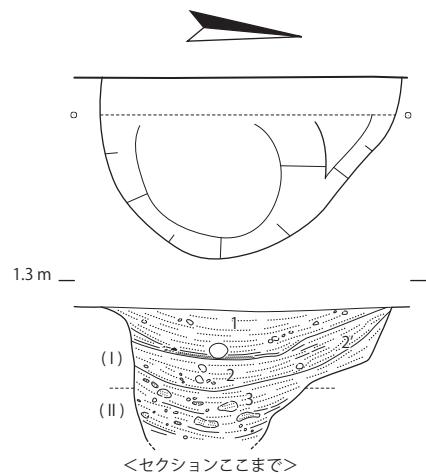
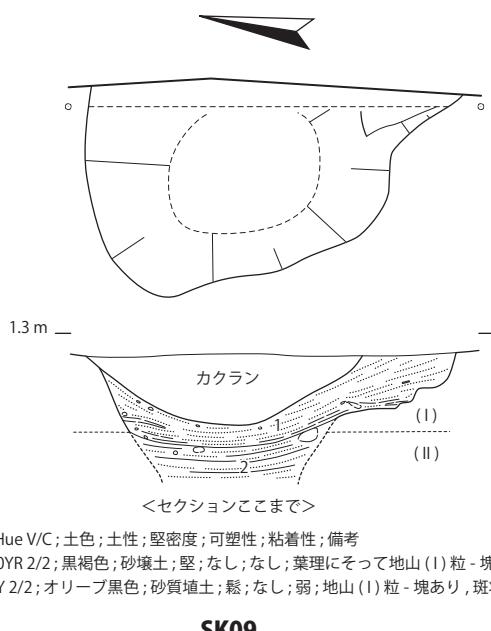
- イ (財)石川県埋蔵文化財センター(2002)金沢市木ノ新保遺跡,p18-19.
- ウ 上田秀夫(1982)14~16世紀の青磁碗の分類,貿易陶磁研究2,日本貿易陶磁研究会
- コ 小松市教育委員会(1992)銭畠遺跡I,石川県
- 小松市教育委員会(1993)銭畠遺跡II,石川県
- 小松市教育委員会(2003)八日市地方遺跡I,石川県
- ス 珠洲市立珠洲焼資料館(1989)珠洲の名陶,石川県
- タ 辰口町教育委員会(2005)和氣後山谷窯跡群,石川県能美市
- 田中輝久(1994)越前焼の歴史,越前古陶とその再現,出光美術館,東京都
- フ 藤澤良祐(1996)中世瀬戸窯の動態,古瀬戸をめぐる中世陶器の世界.資料集,(財)瀬戸市埋蔵文化財センター,愛知県
- ホ 北陸中世土器研究会編(1997)中・近世の北陸,桂書房,p183-208.

図版 1
錢畠遺跡 平面図

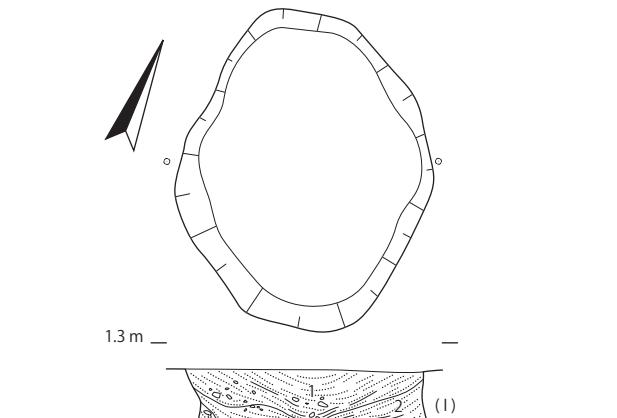




0 2 m
S = 1 : 40



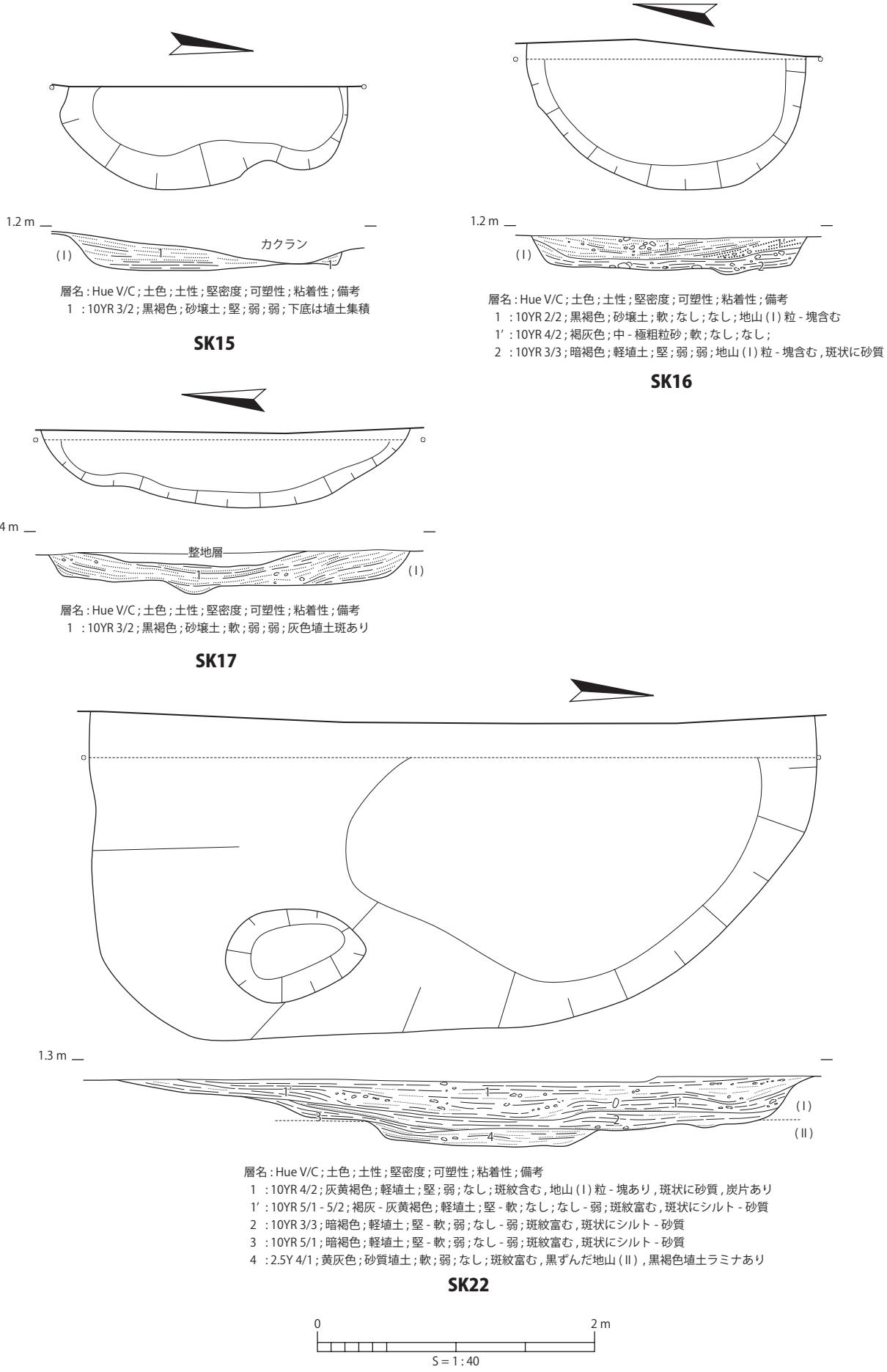
0 2 m
S = 1 : 40

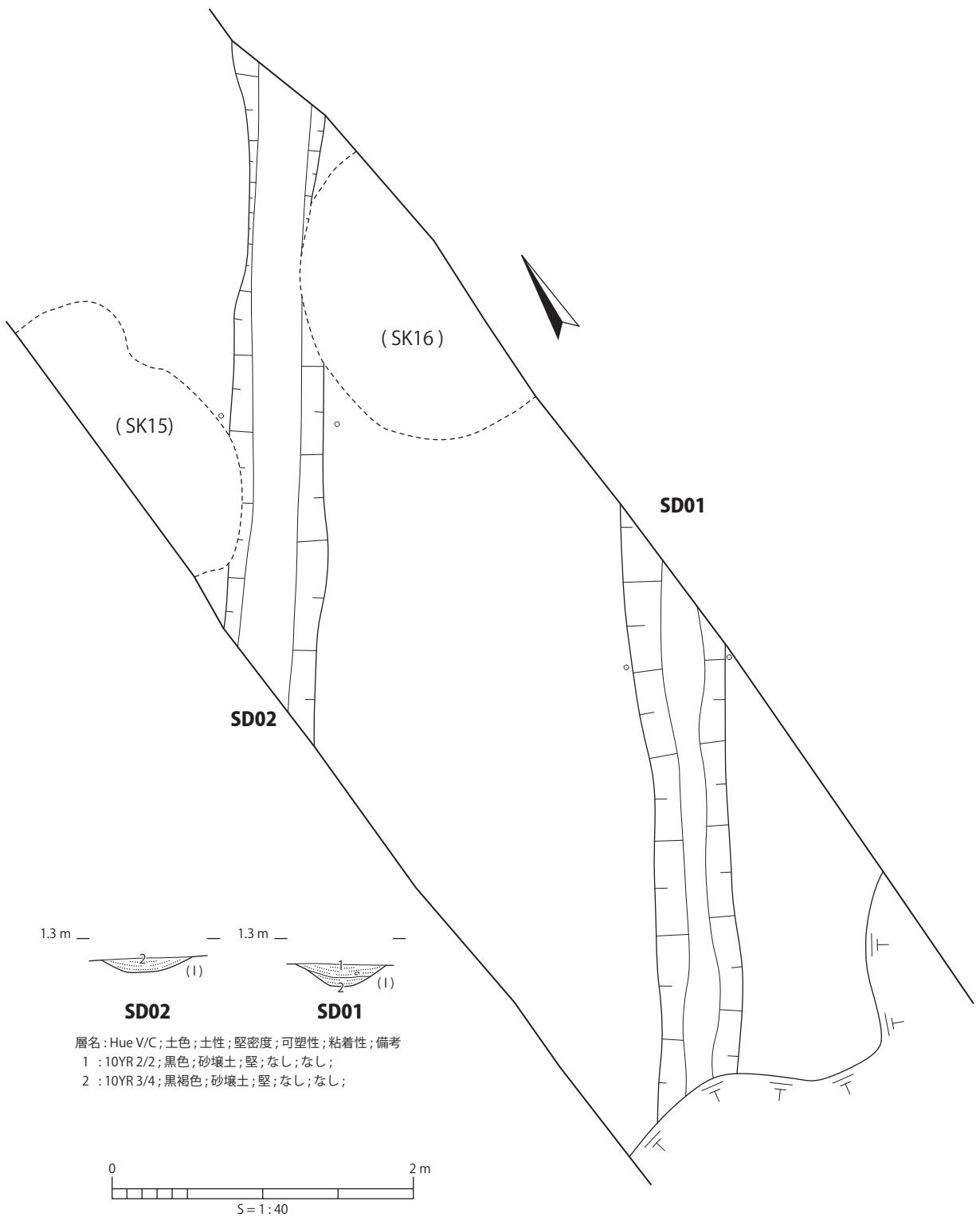


層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 堅密度 ; 可塑性 ; 粘着性 ; 備考
 1 : 10YR 2/2 ; 黒褐色 ; 砂壤土 ; 堅 ; なし ; 弱 ; 斑状に埴土質 , カクラン層か
 2 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 中 - 粗粒砂 ; 堅 ; なし ; なし ; 葉理にそって地山 (I) 粒 - 塊あり
 3 : 10YR 5/2 ; 灰黄褐色 ; 砂壤土 ; 堅 ; なし ; なし ; 葉理にそって地山 (I) 粒 - 塊含む

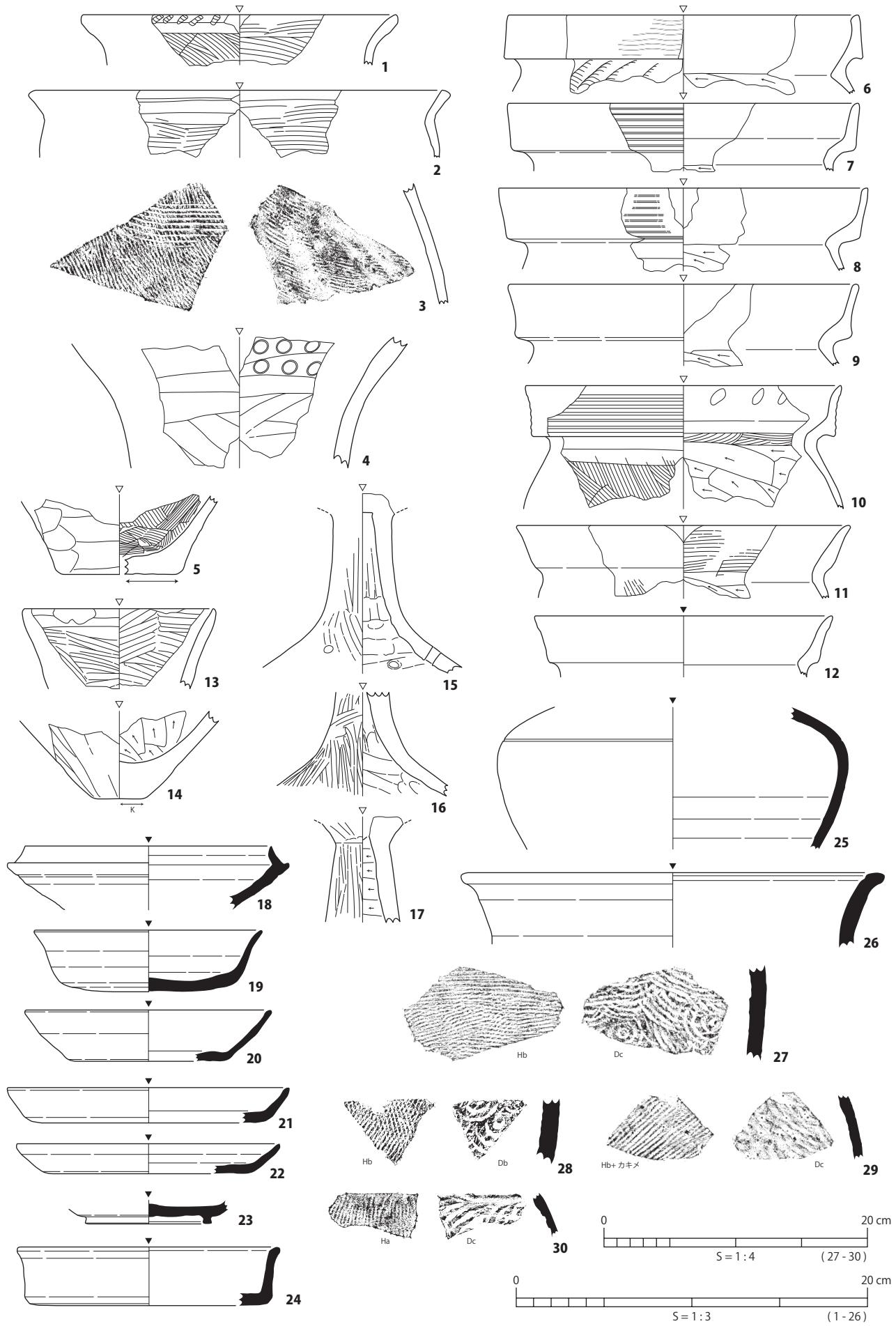
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 堅密度 ; 可塑性 ; 粘着性 ; 備考

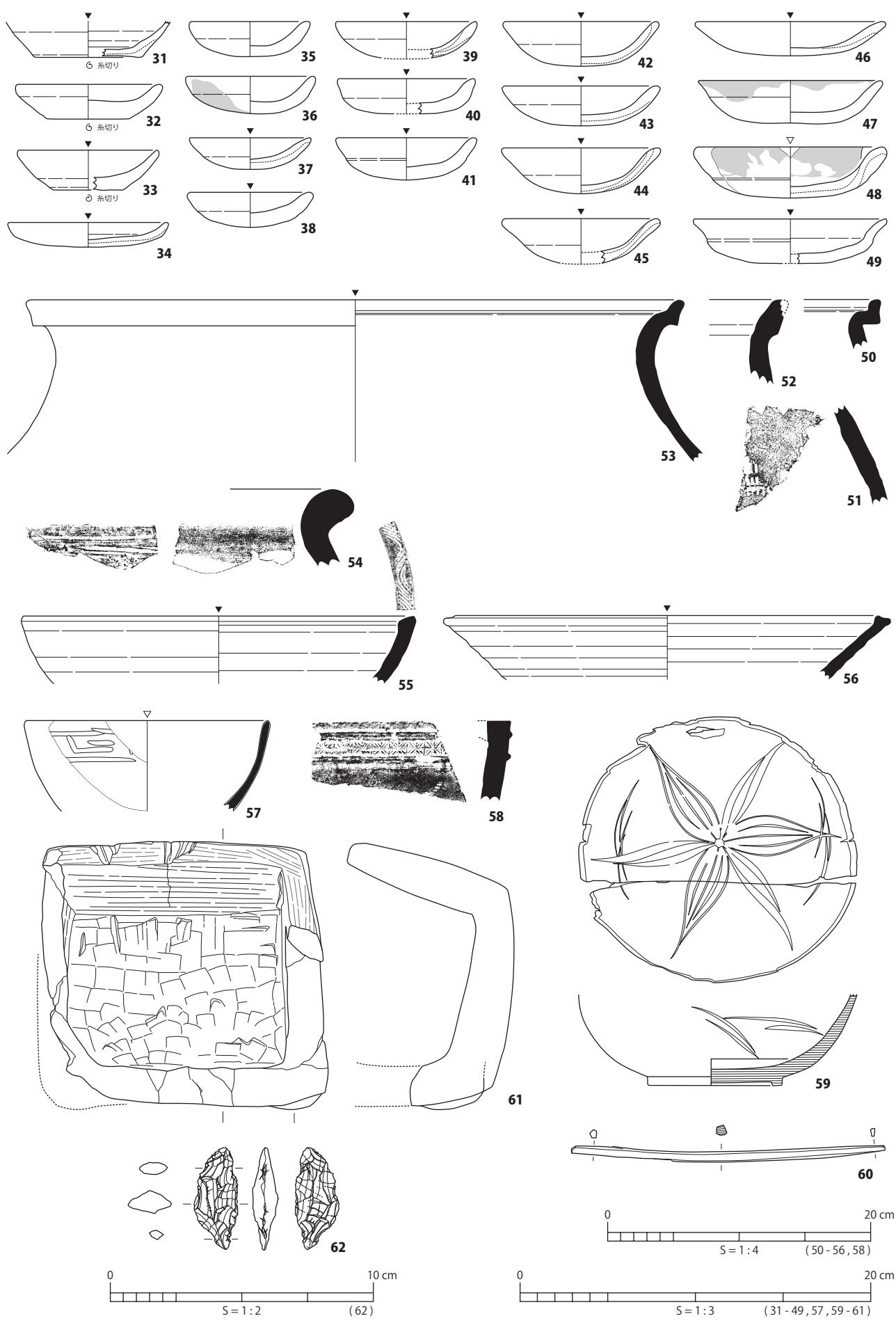
- 1 : 10YR 3/1 ; 黒褐色 ; 中 - 粗粒砂 ; 堅 ; なし ; なし ; 葉理にそって地山 (I) 粒 - 塊あり
- 2 : 10YR 4/2 ; 灰黄褐色 ; 中 - 粗粒砂 ; 堅 ; なし ; なし ; 葉理にそって地山 (I) 粒 - 塊あり
- 3 : 10YR 2/1 ; 黒色 ; 砂壤土 ; 堅 ; なし ; なし ; 葉理にそって地山 (I) 粒 - 塊あり



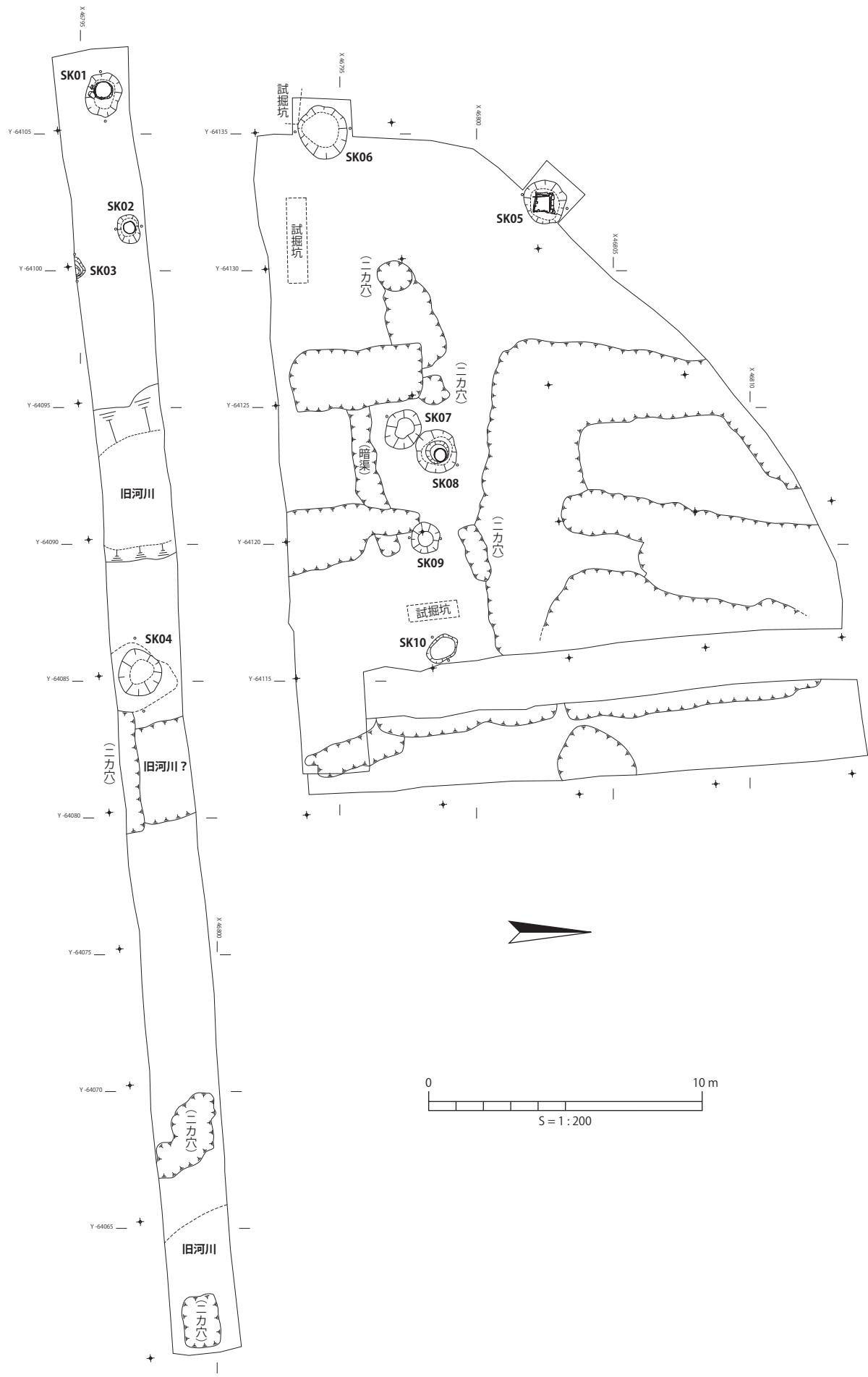


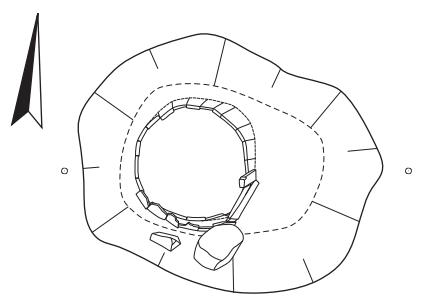
図版
6
錢畠遺跡
出土遺物実測図
1



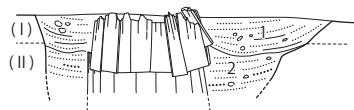


図版 8 梯遺跡 平面図





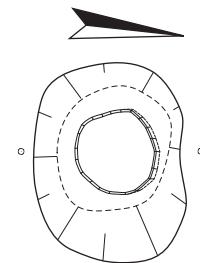
1.1 m



<セクションここまで>

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 堅密度 ; 可塑性 ; 粘着性 ; 備考
 1 : 2.5Y 3/1 ; 黒褐色 ; 砂壤土 ; 堅 ; なし ; なし ; 地山(I)粒 - 塊あり
 2 : 2.5Y 4/1 ; 黄灰色 ; 中 - 極粗粒砂 ; 軟 ; なし ; なし ; 地山(I)粒 - 塊あり

SK01

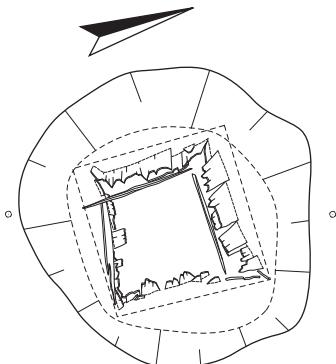


1.1 m

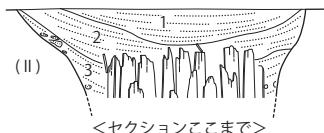


<エレベーションここまで>

SK02



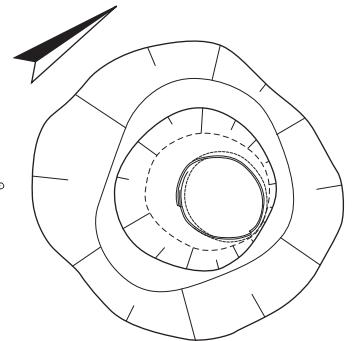
1.3 m



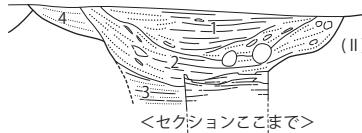
<セクションここまで>

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 堅密度 ; 可塑性 ; 粘着性 ; 備考
 1 : 10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 中 - 粗粒砂 ; 堅 ; なし ; なし ; 炭片稀にあり
 2 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 中 - 粗粒砂 ; 堅 ; なし ; なし ; 炭片 - 地山(I)粒稀にあり
 3 : 2.5Y 4/1 ; 黄灰色 ; 中 - 粗粒砂 ; 軟 ; なし ; なし ; 地山(II)粒 - 塊富む

SK05



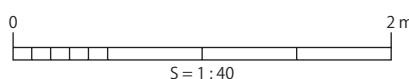
1.2 m

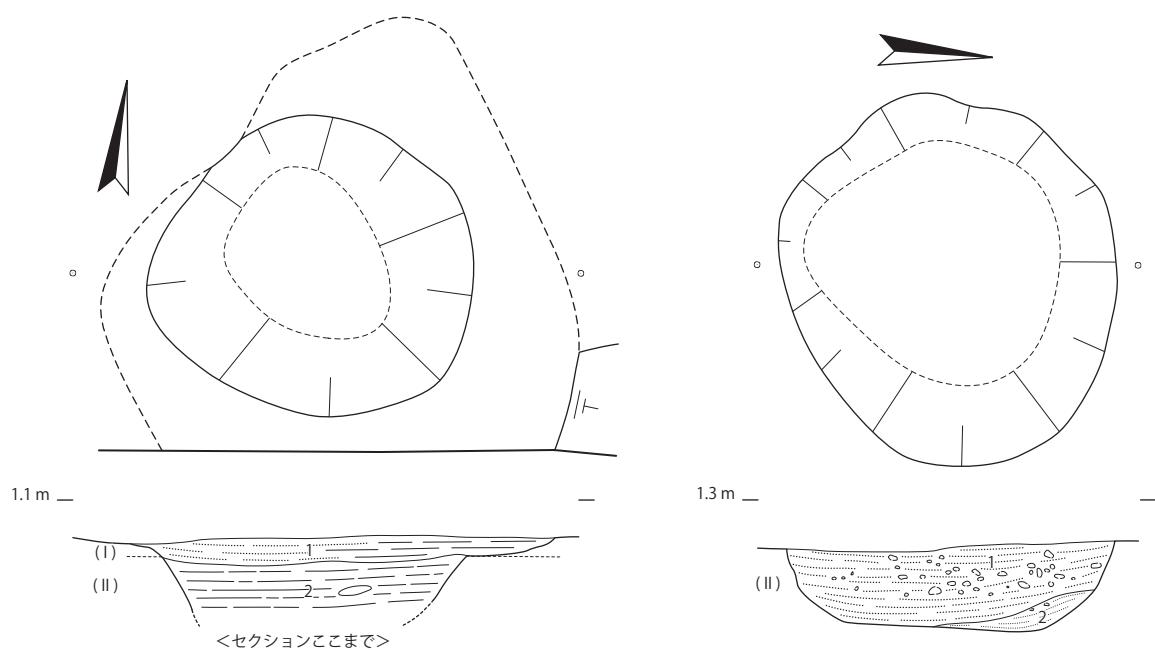


<セクションここまで>

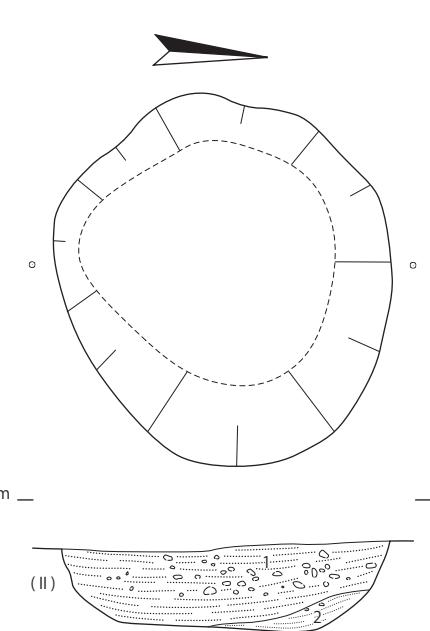
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 堅密度 ; 可塑性 ; 粘着性 ; 備考
 1 : 2.5Y 3/1 ; 黒褐色 ; 砂壤土 - 軽埴土 ; 堅 - 鬆 ; なし ; なし ; 地山(I)粒 - 塊稀にあり
 2 : 2.5Y 3/1 ; 黒褐色 ; 砂壤土 - 軽埴土 ; 堅 - 鬆 ; なし ; なし ; 地山(I)粒 - 塊含む ; 泥は有機質
 3 : 2.5Y 3/1 ; 黒褐色 ; 砂壤土 ; 堅 - 鬆 ; なし ; なし ; 泥は有機質
 4 : 2.5Y 4/1 ; 黄灰色 ; 極細 - 細粒砂 ; 堅 ; なし ; なし ;

SK08

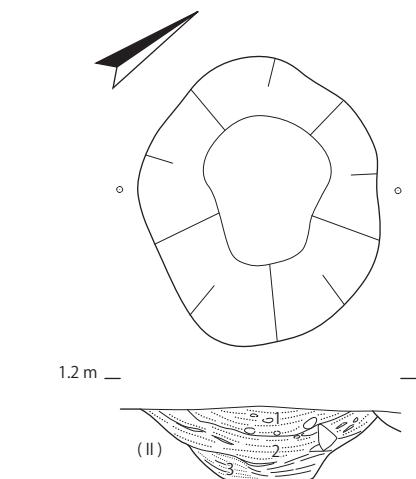




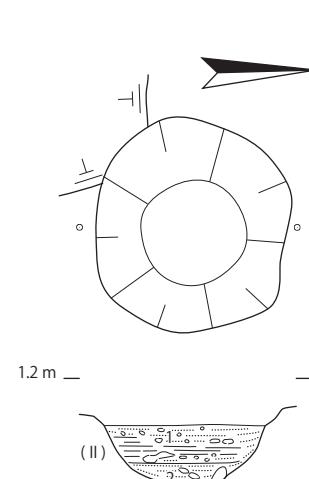
SK04



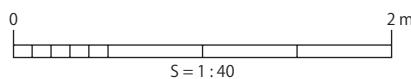
SK06

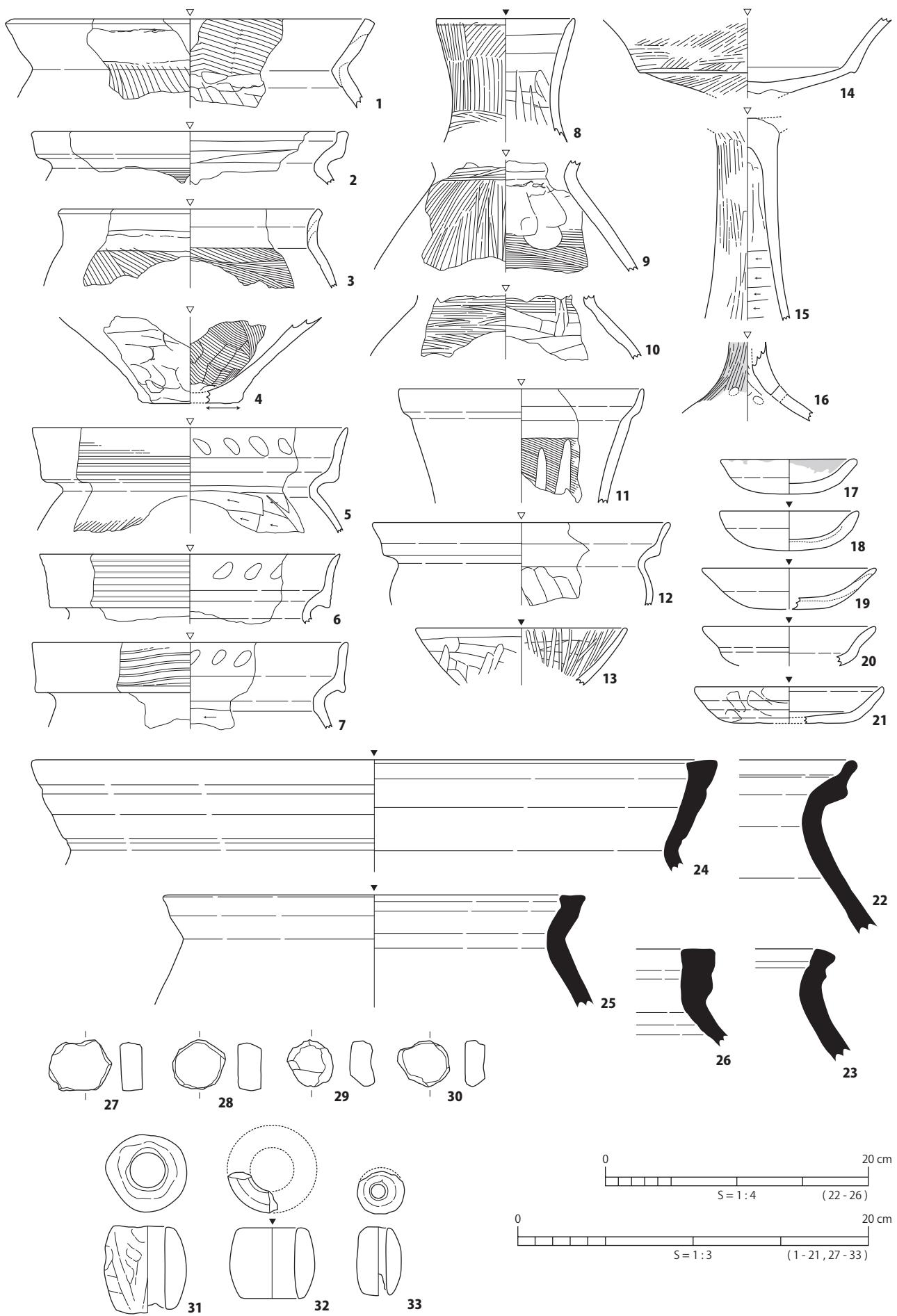


SK07

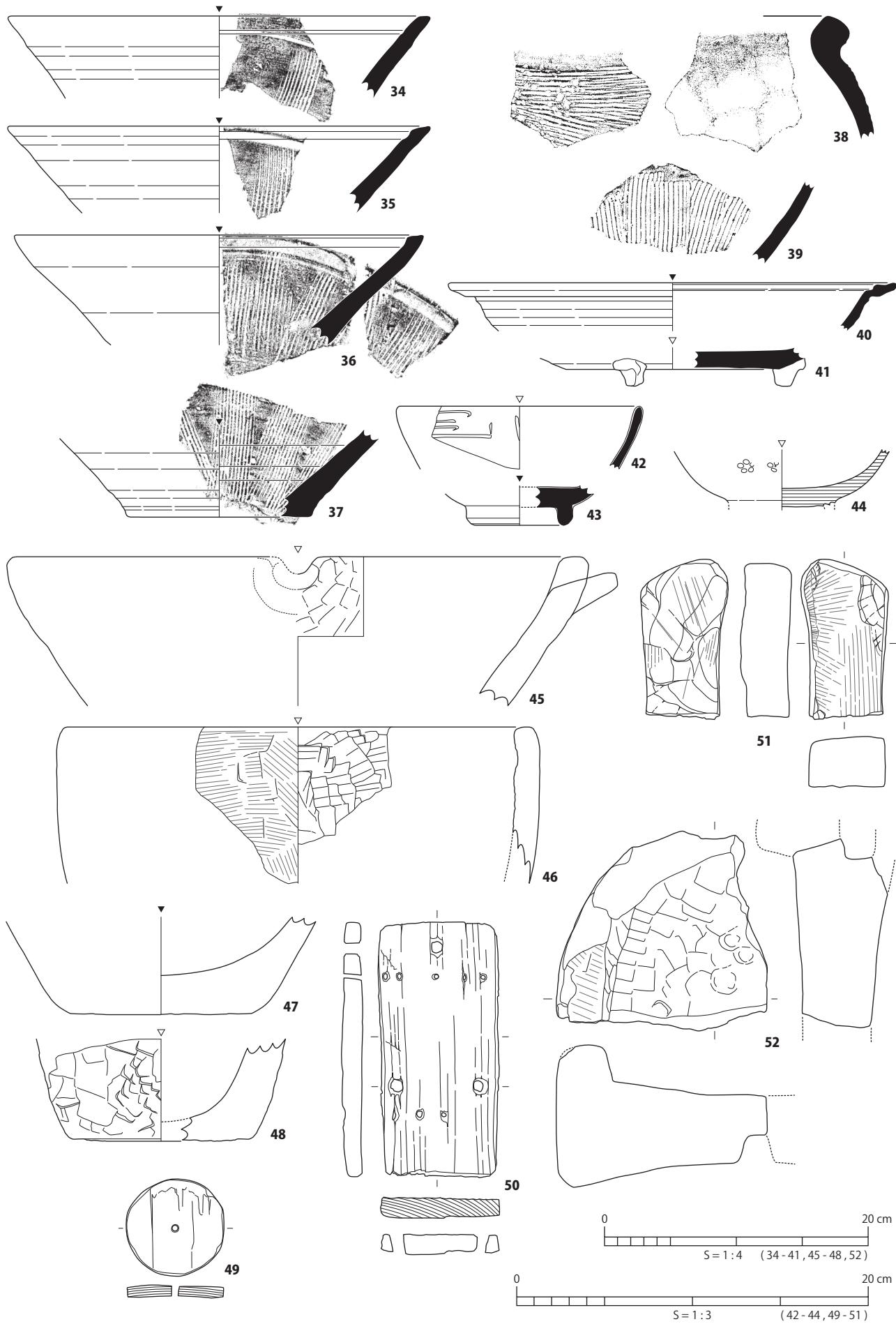


SK09





図版
12
梯遺跡
出土遺物実測図
2





作業状況 - 南から (道路 3 号東側地区)



作業状況 - 南から (道路 3 号西側地区)



全景 - 北から (道路 3 号東側地区南半)



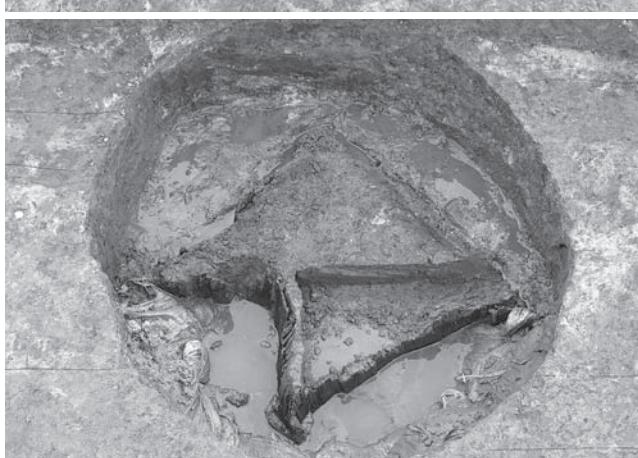
全景 - 北から (道路 3 号西側地区南半)



全景 - 北から (道路 3 号東側地区北半)



全景 - 北から (道路 3 号西側地区北半)



SK02

SK05



SK03

SK04



SK09

SK18



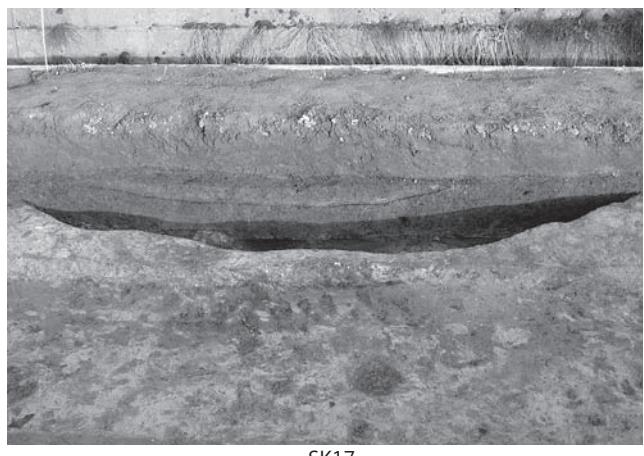
SK01



SK21



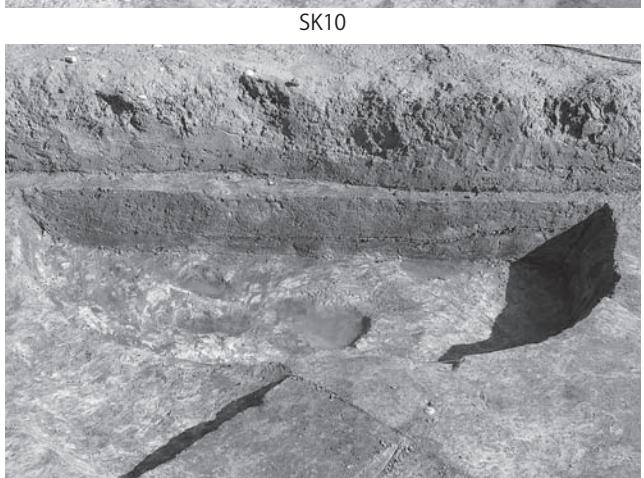
SK10



SK17



SK22

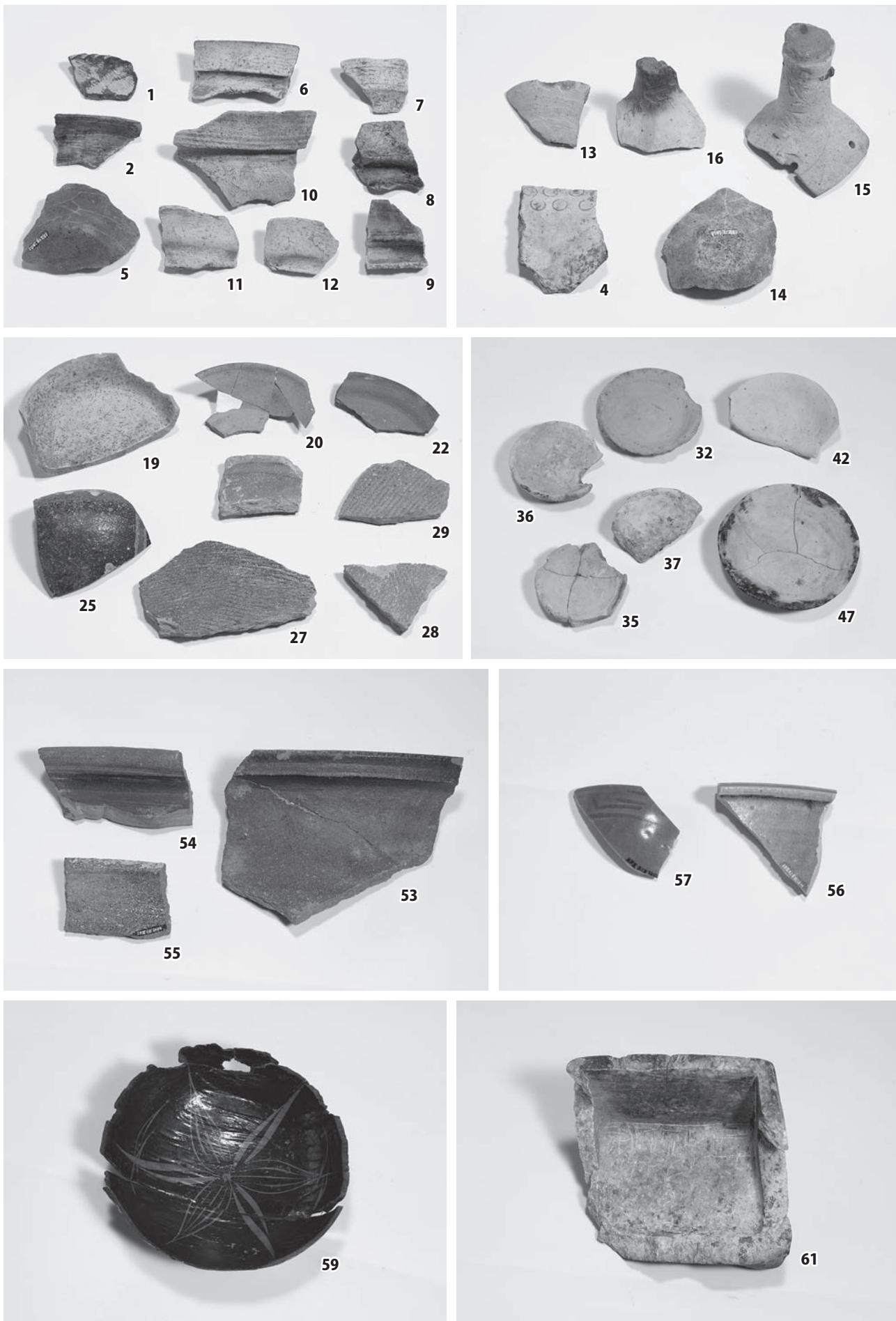


SK16



SD01 - 02

写真図版
4 錢畠遺跡出土遺物





作業状況 - 西から (道路 3 号西側地区)



作業状況 - 東から (用水路 6 号地区)



全景 - 南から (道路 3 号西側地区)



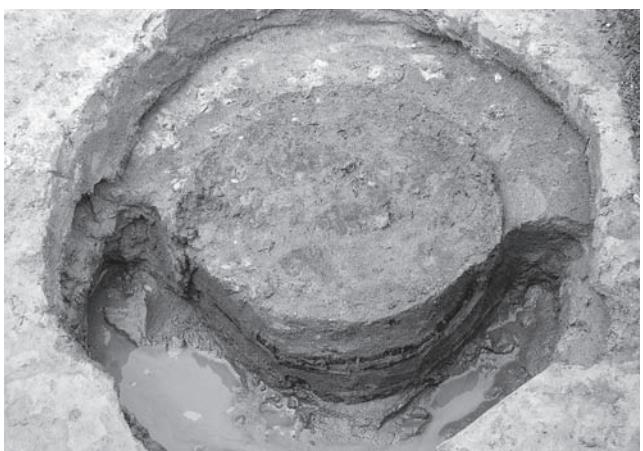
全景 - 東から (用水路 6 号地区)



作業状況 - 北から (道路 3 号東側地区)



全景 - 南から (道路 3 号東側地区)



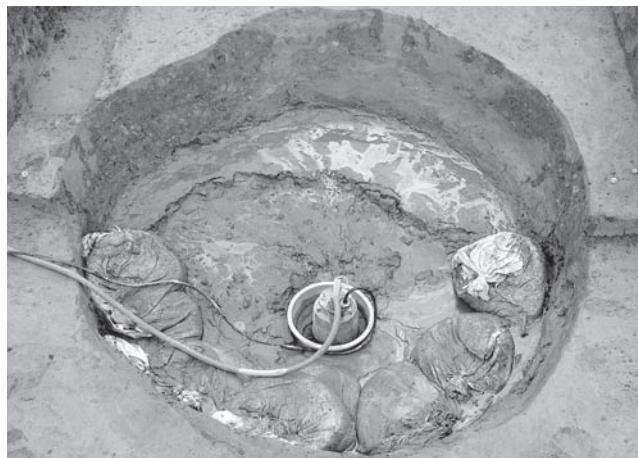
SK01

SK02



SK05

SK08

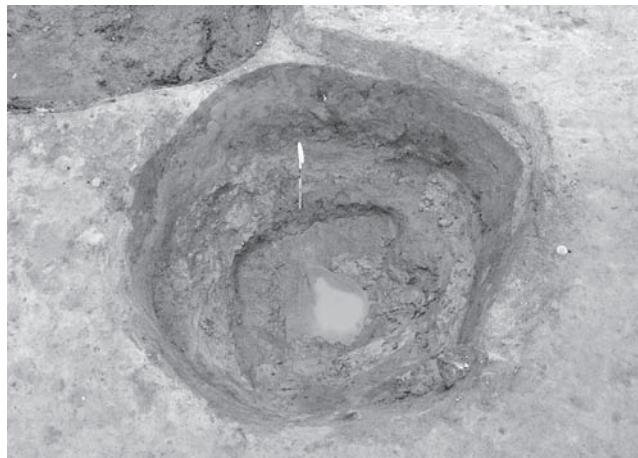


SK04

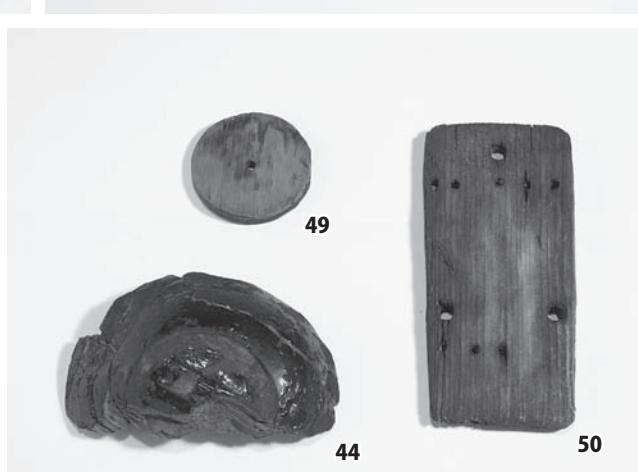
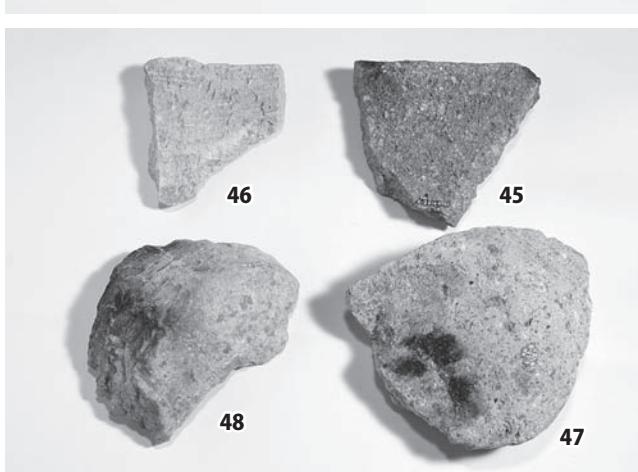
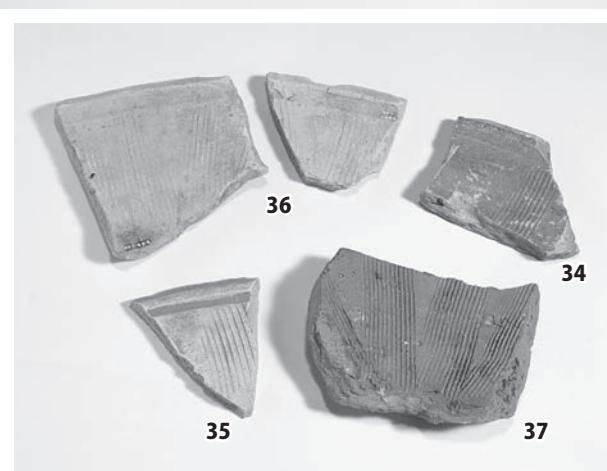
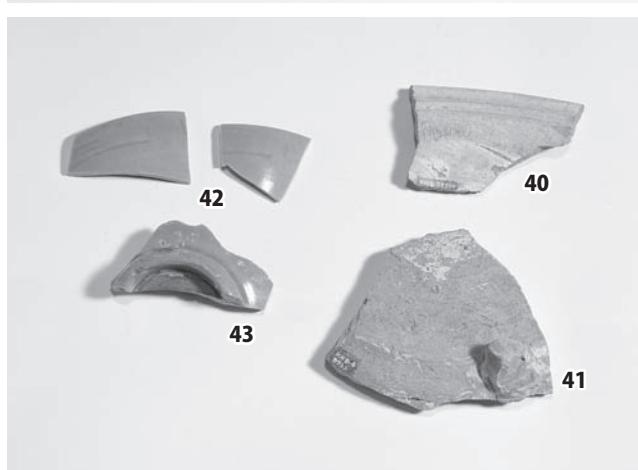
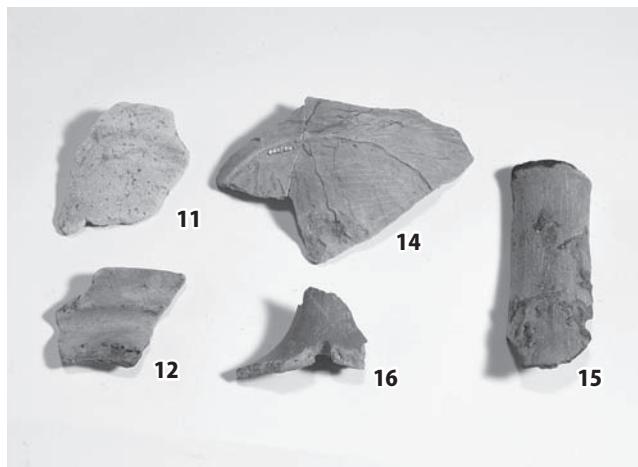
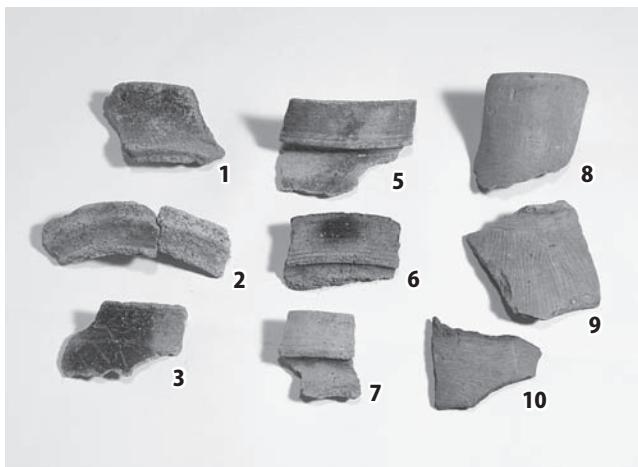
SK06



SK07



SK09



報告書抄録

ふりがな	ぜにばたけいせき・かけはしいせき
書名	銭畠遺跡・梯遺跡
副書名	県営ほ場整備事業（経営体育成型）犬丸梯地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
編・著者名	宮田 明
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL(0761)22-4111(代)
発行年月日	西暦2012年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東經 。' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぜに ばたけ 銭 畠	いしかわけん こまつし 石川県小松市 かはしまち 梯町	17203	03297	36° 25' 21"	136° 27' 5"	2011.6.6～ 2011.8.12, 2011.11.7～ 2011.11.28	350	県営ほ場整備事業 (経営体育成型) 犬丸梯地区
かけはし 梯	いしかわけん こまつし 石川県小松市 かはしまち 梯町	17203		36° 25' 11"	136° 27' 6"	2011.6.6～ 2011.8.12, 2011.11.7～ 2011.11.28	492	県営ほ場整備事業 (経営体育成型) 犬丸梯地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
銭 畠	集 落	弥 生 古 代 中 世	井戸 4、土坑 10、 溝 2	弥生土器、須恵器、土師器、中世陶磁器（加賀、 越前、珠洲、瀬戸美濃、青磁）、漆器、石器（石 錐）、石製品（行火）、木製品（箸）	
要 約	弥生時代・古代・中世の遺物が出土したが、遺構の性格が明らかな井戸は14世紀から16世紀頃と見られ、室町時代の集落の一部と考えられる。				
梯	集 落	弥 生 中 世	井戸 4、土坑 4	弥生土器、土師器、中世陶磁器（越前、珠洲、 瀬戸美濃、青磁）、土製品（円形陶片、土錐）、 石製品（石鉢、砥石、石臼）	
要 約	弥生時代・中世の遺物が出土したが、遺構の性格が明らかな井戸は14世紀から16世紀頃と見られ、室町時代の集落の一部と考えられる。				

錢畠遺跡・梯遺跡

県営ほ場整備事業（経営体育成型）犬丸梯地区に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 24 年 3 月 30 日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町 91 TEL (0761) 22-4111 (代)

印 刷 株式会社 日本テリード出版
石川県小松市上本折町 299 TEL (0761) 24-1166 (代)
